

The Newsletter HOSEI I.J.S.

No.10 Mar.2009.



C O N T E N T S

国際シンポジウム報告	2
研究報告会	5
共催シンポジウム報告	14
東アジア文化研究会報告	17
アルザスシンポジウム勉強会	33
研究所特別セミナー報告	39
研究所訪問報告	41
新刊案内	44

2008年10月30日(木)~11月1日(土)

「日本文化の中の天皇―天皇とは?」

アルザス欧州日本学研究所 [CEEJA] (フランス・
キーンツハイム) にて

国際日本学シンポジウム

「日本文化の中の天皇——天皇とは？」

●日 時：2008年10月30日（木）～11月1日（土）

●場 所：アルザス欧州日本学研究所 [CEEJA]（フランス・キーンツハイム）

●主 催：法政大学国際日本学研究所、フランス国立科学研究学院（UMR8155）、ストラスブール・マークブロック大学日本学部

国際日本学研究所が主催する「国際日本学」を掲げた国際シンポジウムは、2005年のパリ・シンポジウムから始めて、今回で4回目を数える。日本と日本文化とを内外の二つの視点から同時に照射し、そこにこれまでにない立体的な視像を得ていこうという国際日本学の試みは、これまでの、そのような方法論から生じるであろう原理的・理論的な問題をそのものとして問うことで展開されてきた（「国際日本学とは何か」2005年、「ことばとことばを越えるもの」2006年、「翻訳不可能性」2007年）。そのような基礎作業を踏まえて、国際日本学の方法論を具体的に適用することの第一弾として、「日本文化の中の天皇——天皇とは？」をテーマに行われたのが2008年アルザス・シンポジウムであった。

日本の社会や政治を論じる際に、天皇や天皇制を語らずに済ますことは無論できない。他方で、日本の文化を比較的狭く論じる際にも、天皇および天皇制との関わりを無視することは恐らくできないのである。日本文化は、それが産みだしたものの多くで、天皇および天皇制を様々に扱ってきたし、また天皇および天皇制は、日本の文化が何かを産みだす作業そのものに、潜在的に、様々な影響を与え続けてきたのである。日本の文化的産出力の行く末が世界基準できびしく問われている今日、「日本の文化が文化であること、また文化であり続けていることに、これまで天皇および天皇制はどんな役割を果たしてきたのか、また今後どんな役割を果たしうるのか」をあらためて問うことは無意味ではないのである。

しかも、日本の特殊性のいわば象徴ともされている天皇および天皇制の問題は、内外からの視点をすり合わせる、いわば試金石の位置を占めるものとも言いえよう。天皇および天皇制についての内からの視点に関して言えば、そこで語られることがどこまで客観的・普遍的なものとなりえているかが常に問われる。他方、外からの視点に関して言えば、そこで語られることがどこまで問題の特殊性に達しているのかがやはり常に問われる。

このような問題のむずかしさ、重さに鑑みて、今回はシンポジウムに先立ち3回の勉強会も執り行った。勉強会の個別の報告は別ページでなされているのでここではこれ以上立ち入らないが、それぞれの回に日本史の専門家にお越しいただき、歴史的に見た場合の日本の天皇・天皇制の特徴について、詳しくレクチャーをしていただいた。3回のテーマと講師は以下である。①2008年6月14日「中世における天皇について」（法政大学 河内祥輔氏）、②2008年7月12日「『王権』研究の現状」（専修大学 荒木敏夫氏）、③2008年9月27日「二つの『密教』と二つの『顕教』——日本憲政史の中の天皇」（東京大学 坂野潤治氏）

さてこのような準備も経ての3日間のアルザス・シンポジウムでは、日本（法政）から参加の8名（小口雅史、王敏、田中優子、ヨーゼフ・クライナー、相良匡俊、安孫子信、星野勉、市村弘正）とヨーロッパから参加の7名（François MACE [パリ INALCO]、Bernard SCHEID [オーストリア科学アカデミー]、André KLEIN [アルザス CEEJA]、John BREEN [京都日研]、Josef KYBURZ [パリ CNRS]、Sepp LINHART [ウィーン大学]、Eric SEIZELET [パリ・ディドロ大学]）の計15名が研究発表を行い、また各発表後には参加者間で、またフロアーの聴講者も交えて、活発な議論が展開された。

見開きに掲載のプログラムを参照していただきたいが、発表の大まかな内訳を述べれば、時代的には、主に古代天皇・天皇制を扱った発表が2編（小口、MACE）、江戸時代のそれを扱ったものが1編（田中）、明治の天皇・天皇制を扱ったものが3編（相良、BREEN、安孫子）、明治以降昭和までの諸天皇を扱ったものが3編（王、KYBURZ、LINHART）、昭和の天皇・天皇制を扱ったものが3編（星野、市村、SEIZELET）、通史的であったものが1編（SCHEID）、他の王政との比較を行ったものが2編（KREINER、KLEIN）であった。またベースにしている学問領域も多様で、明確な線引きはむずかしいものの、歴史学に基づくものが6編（小口、MACE、KLEIN、相良、BREEN、SEIZELET）、文学に基づくものが2編（田中、王）、社会学に基づくものが1編（LINHART）、思想史・哲学に基づくものが4編（SCHEID、安孫子、星野、市村）、人類学に基づくものが2編（KREINER、KYBURZ）と一応区分されよう。以上に加えて、発表と討議の言語も多様で、日本語、英語にフランス語が入り混じるといった状態でシンポジウムは進行されていた。

このような細部の報告をするのは、このようなことが、国際日本学の現在の到達点を、具体的に、かつ積極的に示していると考えからである。これだけ多様



発表中の CEEJA 所長 クライン氏

な視点やベースから出発し、これだけ多様なテーマを通して、天皇・天皇制が3日間徹底して論じられたのである。そのことで、参加者はほぼ全員がいわば思いがけない仕方で学問的な視野を拡大させ、考察を深化させえたといえる。そのこの意味は大きいし、その成果は各参加者がそれぞれの場所で、近い将来に必ず公にしていこうであろう。国際日本学研究所としては、今後は、事前の準備も含めて、このような国際的かつ学際的な学問的エンカウターの場設定の精度を高め、そのような成果がこのような場で直に、目に見える形で得られるよう、工夫と努力を重ねていきたい。

さて、このような多様な発表が押しなべて扱ったのは、もちろん天皇・天皇制の問題であるが、さらに言えば、その、現実的（政治的）でありながら、また同時に独特な仕方で聖的（文化的・宗教的）であるという二重の性格である。この面で具体的な議論の簡単な紹介を行えば、以下ようになる。

- ①中国皇帝に関するものとの比較で、日本の天皇に関する律令規定を読み解き、日本の天皇に、役割としての神聖性がどこでどのように賦与されていたか、その過程を明らかにしようとしたもの（小口）や、日本の天皇の聖俗の二面性の成立を天武朝の事跡全般の検討を通じて再確認しようとしたものがあった（MACE）。
- ②江戸時代の天皇の存続がやはりその二重性のもとにあったと指摘し、「直し」と呼ばれたその際の神聖性の内実がどのようなものかを明らかにしようとしたものがあった（田中）。
- ③天皇の神聖性は決して宗教とはならずに一貫して儀式的なものにとどまり続けたとし、それに相応する、神道における、文化的伝統の担い手を自認するが宗教へは向かわない傾向の確認を行ったものがあった（SCHEID）。
- ④日本の天皇の神聖性の特徴を、神聖ローマ帝国皇帝のそれ（KLEIN）、また、沖縄王朝王のそれ（KREINER）と比較検討したものがあった。
- ⑤明治天皇の神聖性の確立維持にイメージ（写真・絵）がどのような貢献をなしたか（相良）、また逆に、外国（特に戦争相手国）では同じイメージ（絵葉書）が日本の明治以降の天皇の神聖性破壊にどう貢献したか（LINHARD）を、実例で説明したものがあった。
- ⑥明治天皇の内外での神聖性の確立に勲章制度が果

COLLOQUE INTERNATIONAL 国際シンポジウム	
« Le Japon et l'empereur - vu de l'intérieur, vu de l'extérieur » 「日本文化の中の天皇—天皇とは？」	
Du Jeudi 30 octobre au Samedi 1er novembre 2008 2008年10月30日（木）～11月1日（土）	
Au CEEJA 8 Route d'Ammerschwihr - 68240 KIENZHEIM	
PROGRAMME	
JEUDI 30 OCTOBRE	
9H	Inauguration du colloque par les responsables scientifiques 学術責任者連より「開会」の辞
9H30	OGUCHI Masashi 小口雅史 Département d'Histoire, Université Hôsei, Tôkyô 「古代天皇制の特質とその研究史—その神聖性の起源を中心に—」 « The Imperial Institution in Ancient Japan : On the origins of its sacred character »
10H30	François MACE Institut National des Langues et Civilisations Orientales, Paris « Tenmu et la fonction impériale » 「天武天皇と天皇制」
11H30	Pause
11H45	WANG Min 王敏 RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô 「お印について」 « On the imperial crest »
14H	TANAKA Yûko 田中優子 RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô 「直き天皇—江戸時代にとって天皇とは何か」 « Upright - The image of the emperor in Edo Period culture »
15H	Bernhard SCHEID Austrian Academy of Sciences « Shinto as cultural identity discourse centring on the Tenno » 「天皇を中心とした文化的アイデンティティの言説としての神道」
15H45	Pause
16H	Josef KREINER RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô « Some thoughts on the ideology and the power-charisma of the Ryûkyûan Kingdom - Another "Descendant of the Sun" » 「琉球王国の権力カリスマについての一考察—もう一人の「太陽の子」
17H	André KLEIN Président du CEEJA, ancien élève de l'ENA « Les Habsbourg, le Saint-Empire et l'Alsace » 「ハプスブルグ家、神聖ローマ帝国とアルザス」

VENDREDI 31 OCTOBRE	
9H	SAGARA Masatoshi 相良匡俊 RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô 「幕末・明治期における天皇の肖像」 « The Emperor's portrait in Meiji times »
10H	John BREEN SOAS, University of London, London « The emperor's ornaments : exchange between the Meiji emperor and the sovereigns of Europe » 「天皇を飾る：贈答からみた明治天皇と欧州君主」
11H	Pause
11H30	Josef KYBURZ CNRS, UMR 8155, Paris « The Japanese emperor in foreign eyes : Panosby-Fane, Griffis, Mosley » 「外国人から見た日本の天皇：ボンソンビ・フェイス、グリッフィス、モスリー等」
14H	Sepp LINHART Universität Wien, Vienne « Meiji-, Taishô- und Shôwa-Tennô auf japanischen und westlichen Postkarten, 1900 bis 1945 » 「西洋諸国と日本の絵葉書に現れる明治・大正・昭和天皇」
15H	ABIKO Shin 安孫子信 RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô 「『哲学』と天皇制—西周の場合」 « 'Philosophy' and the Imperial Institution according to Nishi Amone »
16H	Pause
16H30	HOSHINO Tsutomu 星野勉 RCJIS, Université Hôsei, Tôkyô 「和辻哲郎の『日本文化と天皇制』 « Watsuji Tetsurô on 'Japanese Culture and the Emperor System' »
17H30	Discussion
SAMEDI 1 ^{er} NOVEMBRE	
9H	ICHIMURA Hiromasa 市村弘正 Dept. of Politics, Hôsei University 「《天皇制社会》について」 « Society and the imperial regime »
10H	SEIZELET Eric Institut d'Asie Orientale, Lyon « Réflexions autour du processus d'élaboration de l'article 1 de la Constitution du Japon et de la naissance de l'« empereur-symbole » 「日本国憲法第一条の草案作成過程と「象徴天皇」誕生についての考察」
11H	Discussion et conclusion

シンポジウムプログラム

たした役割を明らかにしたもの（BREEN）、また、お印という制度が日本の天皇に、きわめて独特な神聖性を与えていると指摘したものがあった（王）。

⑦神聖性の陰で、それでは天皇の身体・身体性はどう見られ、どう語られてきたかを、明治以降昭和に至るまでの3人の天皇に関して、明らかにしようとしたものがあった（KYBURZ）。

⑧それ自身一つの神聖性とも言いえる新憲法での象徴天皇規定が、どのような政治的力関係の下で、どのような過程で導入されるに至ったのかを明らかにしようとしたものがあった（SEIZELET）。

⑨たとえば西周（安孫子）や和辻哲郎（星野）、さらに丸山真男・藤田省三（市村）といった明治以降現代に至るまでの哲学・思想の主だった担い手たちが、天皇、とくに天皇の神聖性と思想的にどのように戦い、しかしどのように折り合っていたかを吟味したものがあった。

以上の発表は近刊のシンポジウム「報告集」に全文収録の予定である。詳しい議論はそこで確認していただくことができる。今回のアルザス・シンポジウムは、天皇・天皇制問題の大きさと複雑さ、にもかかわらず、国際日本学の方法論の力強さと有効性とを再認識させてくれるものであったと考える。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）】

International Symposium: Report Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

International Japanese Studies Symposium

"The Emperor within Japanese Culture: what is the Emperor?"

Date Thursday, 30 October - Saturday, 1 November 2008
Location Centre Europeen D'Etudes Japonaises D'Alsace (CEEJA) (Kientzheim, France)
Sponsors Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Centre National de la Recherche Scientifique, France, and Strasbourg Marc Bloch University Japanese Faculty

This symposium consisted of 15 presentations by seven participants from Japan and eight participants from

Europe. Various themes pertaining to the emperor system's 1500-year history, spanning from the ancient emperor-system to the Shōwa Emperor, were handled in terms of the wide-ranging academic concerns of history, literature, sociology, philosophy, history of thought, and anthropology. The basic issue from which all presentations set out, and to which they finally returned, was the Japanese Emperor's unique sacredness which takes the shape of non-administration within real politics. This sacredness, implied in the Nara period Ritsuryō governing system, continues to be supported under the new constitution with its untouchable symbolic emperor. The following summarized areas are those debated during the symposium: 1) the origins and truth about this sacredness, 2) various secondary cultural devices which contribute to maintaining it, 3) comparative examinations of this sacredness with sacredness in other sovereignty, 4) acceptance by foreigners of this sacredness, and 5) the significance and limitations in the work of thinkers of the modern age who battled with this sacredness under the influence of Western thought.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

국제심포지움보고

학술프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구로서의 「국제일본학」의 구축

국제일본학 심포지움 「일본 문화 속의 천황—천황이란?」

시간: 2008년 10월 30일(목) - 11월 1일(토)
장소: 알자스 구주 일본학 연구소 (CEEJA) (프랑스·킨츠하임)
주최: 호세이 대학 (法政大学) 국제일본학 연구소, 프랑스 국립 과학 연구 학원 (UMR8155), 스트라스부르 그·마르크 블로크 대학 일본학부

此次研讨会上, 来自日本的 8 名与会者和来自欧洲的 7 名研究者发表了自己的研究成果, 分别从历史、文

学、社会学、哲学、思想史、人类学等多学科的角度, 对从古代天皇制到昭和天皇为止 1500 年间天皇制的历史进行了全方位、多层次的考察。这些研究成果的出发点和落脚点都归结于在现实政治层面“不执政”的日本天皇所具有的独特的神圣性。这种神圣性在奈良时代的律令中就已经隐约有所显现, 而在当今的宪法框架下仍然以“象征天皇制”的方式得以完整地保留下来。具体而言, 此次研讨会主要就以下几点进行了研讨: ①这种神圣性的起源及内涵; ②对于维持这种神圣性起次要作用的文化性结构; ③这种神圣性与其他王权的神圣性之间的比较考察; ④外国人对于这种神圣性的理解方式; ⑤近代以来, 在西方思想的影响下, 与这种神圣性进行激烈交锋的思想家们的历史意义及其局限。

【执笔者: 安孙子 信

(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)】

국제 심포지움 보고

학술 프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구로서의 「국제일본학」의 구축

국제 일본학 심포지움

「일본 문화 속의 천황—천황이란?」

·일시 2008년 10월 30일(목) ~ 11월 1일(토)
·장소 알자스 구주 일본학 연구소 [CEEJA] (프랑스·킨츠하임)
·주최 호세이 대학 (法政大学) 국제일본학 연구소, 프랑스 국립 과학 연구 학원 (UMR8155), 스트라스부르 그·마르크 블로크 대학 일본학부

이번 심포지움에서는 일본에서 참가한 8 명과 유럽에서 참가한 7 명, 합계 15 명의 발표가 있었다. 고대 천황제에서부터 쇼와 (昭和) 천황에 이르기까지 1500 년

의 천황제 역사가, 다양한 테마로 즉, 역사, 문학, 사회학, 철학, 사상사, 인류학 등 다양한 학문적 관심을 토대로 다루어졌다. 이와 같은 발표의 시발점과 중착점이 된 근본 문제는, 일본 천황이 견지하고 있는, 현실 정치에 있어서의 불집정 (不執政) 이라는 형태의 독특한 신성성이었다. 나라 (奈良) 시대의 율령 중에 암시되어 있는 이 신성성은, 오늘 날의 신헌법하에서도 상징 천황제라는 형태로 그대로 유지되고 있다. 이번 심포지움에서 구체적으로 논의된 것을 정리하면 다음과 같다. ① 신성성의 기원과 내실, ② 신성성의 유지에 공헌하고 있는 부차적이고 다양한 문화적 장치, ③ 이 신성성과 다른 왕권의 신성성과의 비교 검토, ④ 신성성이 취한 외국인 수용 방법, ⑤ 근대 이후, 서양 사상의 영향하에서 신성성에 몰두했던 사상가들의 활동의 의미와 한계.

【기사 집필: 아비코 신 (安孫子 信, 호세이 대학 국제

일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

2008 年度第 1 回合同研究会

木村 哲朗（奥 尻 島）・瀬川 拓郎（北 海 道）
八木 光則（岩 手 県）・伊藤 博幸（岩 手 県）
小嶋 芳孝（石 川 県）・小口 雅史（法政大学 東京）

● 日 時：2008 年 8 月 31 日（日）～9 月 2 日（火）

● 場 所：北海道奥尻島

学術フロンティア・プロジェクト『異文化研究としての「日本学」』におけるサブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」は、北の東北・北海道と南の琉球諸島という二つの境界領域の文化に目を向けることにより、多元的な日本文化の構造を解明し、日本文化研究に新しい局面を切り拓くことを目的としている。その活動の一環として、去る 8 月 31 日～9 月 2 日に、奥尻島（北海道奥尻郡奥尻町）にて、本学関係者及び地元北海道、さらに岩手・宮城・石川県より計 11 名の研究者（北方交流科研グループも合流）が集まり、本年度第 1 回合同研究会を開催した。

〈研究会報告〉

サブ・プロジェクト③『日本の中の異文化』の本年度、第 1 回目の研究会は、去る 8 月 31 日（日）、9 月 1 日（月）と 2 日（火）の三日間にわたって、北海道の奥尻島で行われた。法政大学側からは小口雅史、地元奥尻島からは木村哲朗氏、北海道からは瀬川拓郎氏、岩手県からは八木光則・伊藤博幸両氏、石川県からは小嶋芳孝氏の計 6 名が参加し、さらに同じ奥尻を研究テーマに取り上げている北方交流科研グループその他から、天野哲也・小野裕子・熊谷公男・中村和之・乾芳宏の各氏が参加した。

奥尻島は一説には古代史料に現れる津軽のさらに北と目される渡嶋の比定地と深く関わる場所ともいわれ、サハリンから南下したオホーツク文化が、本体はオホーツク海沿岸に広がる一方で、この奥尻島方面にも南下し、関連遺跡を残したという点で、きわめて特異な、北方交流史研究上重要な地点の一つである。そこでぜひ現地の遺跡を踏査し、それを踏まえた上で、古代の奥尻島をどのように理解し北方史ないし北方交

流史上に位置づけるのかをテーマに研究会を企画した。本来は昨年度開催予定であったが、地元の受入の都合で本年に延びたものである。

8 月 31 日は、木村哲朗氏の厚いご配慮で、オホーツク文化の遺物を出した青苗遺跡の出土品を特別に調査させていただいた。またその他、島内から出土したさまざまな様式の土器についても長時間にわたって精査させていただき、奥尻島を独自の文化として位置づける、いわゆる「青苗文化」論の可能性を、実地に即して改めて検討した。

9 月 2 日には、町の教育委員会のある海洋研修センター「フラシャード 21」会議室を提供していただき、そこで丸一日かけて、奥尻島の古代文化について、研究発表と討論を繰り返した。小口の問題提起「『古代渡嶋?』での開催にあたって」のあと、木村哲朗氏から「青苗砂丘遺跡の遺構と出土遺物について」と題して、オホーツク文化と深く関わる島内のもっとも注目される遺跡の紹介があった。また小嶋芳孝氏からは「7・8 世紀のロシア沿海地方と北海道」と題して、奥尻島をロシア沿海州地方と北海道との関連でどのように位置づけるかという視点での報告があった。また青苗文化の提唱者瀬川拓郎からは「アイヌと和人の境界—中間領域の実態をめぐって—」と題して、和人ととの交易の基点としての奥尻島の位置付け、奥尻島に代表される小地域集団の存在について、その役割分析があった。最後に八木光則氏から「青苗文化論をめぐる二・三の疑問」と題して、奥尻島を独自の青苗文化圏と位置づける瀬川説について、本州の土器の研究者としての立場から、いくつかの確認事項が提起され、それをふまえて本州との交易の問題についての言及があった。

なお 北方交流科研グループその他からの参加者の



木村哲朗氏の報告風景



青苗遺跡にて

報告をあわせて紹介すると、中村和之氏から「女真の海の活動はいつまで続くか？」と題して奥尻島を取り巻く交易の世界の紹介が、また小野裕子氏から「古代の土器から見た幣路弁嶋」ということで、奥尻島を含む北海道内の土器の地域差についての報告が、また天野哲也氏から「礼文島香深井1遺跡2号竪穴住人の行方―肅慎〔アシハセ〕論の新たな展開―」と題して、礼文島のオホーツク文化人が、奥尻島を経由してさらに佐渡まで南下した可能性についての言及があった。

報告の都度、関連する他の研究者からそれぞれコメントが出され、それを受けての討論が繰り返された。

また総括討論は、会場閉鎖後はホテルに戻って深夜にまで及び活発なものとなった。

これらを通じて奥尻島および渡島半島地域の特性があらためて確認され、今後の北方交流世界解明のための重要な一里塚となったことは間違いない。北方世界全体の中での位置付けは来年度の総括の中で明らかにしていきたい。

9月2日には島内の遺跡を再度踏査後、散会となった。

【記事執筆：小口 雅史（法政大学文学部教授）】

Research Report Meeting

Academic Frontier Sub-project 3: “Other cultures within Japan”

1st Joint Research Meeting of 2008

Speakers	KIMURA Tetsurō (Okushiri-tō) SEGAWA Takuro (Hokkaidō) YAGI Mitsunori (Iwate Prefecture) ITŌ Hiroyuki (Iwate Prefecture) KOJIMA Yoshitaka (Ishikawa Prefecture) OGUCHI Masashi (Hosei University, Tokyo)
Date	Sunday, 31 August–Tuesday, 2 September 2008
Location	Okushiri-tō, Hokkaidō

The first research meeting of Sub-project 3 was held from 31 August to 2 September in Okushiri-tō, Hokkaidō. One theory advocates Okushiri-tō as a strong contender for the debated locality of “Watarinoshima” that features in ancient records. Okhotsk culture moving south from Sakhalin did not confine itself to its major stronghold of the Okhotsk coast, but also moved southwards towards

Okushiri-tō. Evidence of related excavated remains indicates this to be a unique location of great importance to research in the history of exchange in the northern territories. We seized the chance to investigate the remains on location, using them as the basis for the theme of our research meeting, which asked how we should interpret ancient Okushiri-tō, and place it within the history of the northern territories as well as the history of exchange there. The first day was spent closely examining earthenware excavated on the island, and the second day consisted of alternate research presentations and discussion about the ancient culture of Okushiri-tō. Results newly confirmed the distinctive features of Okushiri-tō and the Oshima Peninsula region, and reached an important landmark for future understanding of the world of exchange in the northern territories. We aim to clearly explain the island's place within the sphere of the northern territories at the roundup session next year. After one more survey of the remains on the island on the third day, the research meeting came to a close.

Report by OGUCHI Masashi

(Professor, Faculty of Letters, Hosei University)

研究報告会

学术开拓推進項目③日本内部の異文化

2008 年度第 1 次合同研究会

報告人： 木村 哲朗（奥尻島）KIMURA Tetsurō
瀬川 拓郎（北海道）SEGAWA Takurō
八木 光則（岩手県）YAGI Mitsunori
伊藤 博幸（岩手県）ITŌ Hiroyuki
小嶋 芳孝（岩手県）KOJIMA Yoshitaka
小口 雅史（法政大学 東京）

OGUCHI Masashi

時 間：2008 年 8 月 31 日（周日）－9 月 2 日（周二）

地 点：北海道奥尻島（Okushiri-tō）

第 3 学术开拓推進項目第 1 次研究会于 8 月 31 日－9 月 2 日在北海道奥尻島召开。学界有一种观点认为，奥尻島与人们推测的古代史料中出现的渡嶋（Watarino-Shima）的所在地有很深的渊源。鄂霍次克文化自萨

哈林南下，其主体虽然位于鄂霍次克海沿岸，但同时也经奥尻島方向南下，并留下了相关遗迹。从这一点来看，在北方交流史研究方面，奥尻島是一个极其特殊而重要的地点。本次研究会的主旨就是希望通过前往遗迹现场进行实地考察，来充分地理解古代的奥尻島在北方史乃至北方交流史上所具有的重要地位。研究会第一天，与会人员对奥尻島内出土的土器进行了详细考察。第二天，与会人员围绕着奥尻島的古代文化进行了研究成果发表和讨论。通过上述活动，与会人员进一步确认了奥尻島以及渡島（Oshima）半島地域的特性，从而也使得本次研究会成为解析和厘清北方交流全貌过程中的一座重要里程碑。与会人员希望，在下一年度的总结中，进一步明确关于奥尻島在北方研究整体中的地位。第三天，与会人员再次前往奥尻島内的遗迹进行实地考察。至此，本次研究会圆满结束。

【执笔者：小口 雅史（法政大学文学部教授）】

연구 보고회

학술 프론티어 서브 프로젝트③ 일본 안의 이문화

2008 년도 제 1 회 합동연구회

- 보고자 기무라 테츠로씨(木村 哲朗)、오쿠시리토(奥尻島)
세가와 타쿠로씨(瀬川 拓郎)、홋카이도(北海道)
야기 미즈노리씨(八木 光則)、이와테현(岩手県)
이토 히로유키씨(伊藤 博幸)、이와테현(岩手県)
코지마 요시타카씨(小嶋 芳孝)、이시카와현(石川県)
오구치 마사시씨(小口 雅史)、호세이 대학, 도쿄(法政大学、東京)
- 일시 2008년 8월 31일(일)~9월 2일(화)
•장소 홋카이도 오쿠시리토(北海道奥尻島)

제 3 회 서브 프로젝트 제 1 회 연구회가 8월 31일부터 9월 2일까지 홋카이도 오쿠리시토에서 개최되

었다. 오쿠시리토는 일설에 의하면 고대 자료에 나타나는 와타리노시마(渡嶋)의 비정지(比定地)와도 깊은 관계가 있는 장소로 일컬어지고 있다. 사할린에서 남하한 오호츠크 문화가, 주된 정착지였던 오호츠크해 연안과는 별도로, 이 오쿠시리토 방면으로도 남하하여 관련 유적을 남겼다는 점에서 매우 특이한, 북방교류사 연구에 있어서 중요한 지점의 하나이다. 이러한 중요한 의미를 가진 현지의 유적을 답사하고, 그것을 바탕으로 고대 오쿠시리토를 어떻게 이해하고, 북방사 내지 북방교류사에 있어서 고대 오쿠시리토의 위상을 어떻게 정립해야 하는지를 테마로 연구를 실시했다. 첫 날은 섬 안에서 출토된 도기를 정밀 검토 하고, 둘째 날은 오쿠시리토의 고대 문화에 관한 연구발표와 토론을 반복했다. 이러한 활동을 통해서 오쿠시리토 및 오시마반도 지역의 특성을 재확인 하고, 앞으로 진행될, 북방 교류 세계를 해명하는데 있어서 중요한 이정표를 세울 수 있었다. 북방 세계 전체 안에서의 위치는 내년에 실시될 총괄발표에서 밝힐 예정이다. 또한 셋째 날에는 섬 안의 유적을 다시 한번 답사한 후 연구를 마쳤다.

【기사 집필: 오구치 마사시 (호세이 대학 문학부 교수)】

学術フロンティア・サブプロジェクト③日本の中の異文化

2008 年度第 2 回合同研究会

木村 淳一 (青森市教育委員会)・葛城 和穂 (青森県埋蔵文化財調査センター)
佐藤 智生 (青森県埋蔵文化財調査センター)・須藤 弘敏 (弘前大学)
渡辺 晃宏 (奈良文化財研究所)・山田 祐子 (秋田県埋蔵文化財センター)
宇部 則保 (八戸市教育委員会)・中島恒次郎 (太宰府市教育委員会)
新里 貴之 (鹿児島大学)・高梨 修 (奄美市教育委員会)
澄田 直敏 (喜界町教育委員会)・J. クライナー (法政大学)
小口 雅史 (法政大学)

●日時: 2008 年 9 月 13 日(土)~9 月 15 日(月)

●場所: 青森県青森市 青森県埋蔵文化財調査センター

学術フロンティア・プロジェクト『異文化研究としての「日本学」』におけるサブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」は、昨年度の奄美大島の名瀬と喜界島で開催された、律令国家の南周辺でおこなわれた異文化・異民族との接触を取り上げた研究会に引き続き、今年度の主な研究テーマとしなっている「大和國家の北辺の文化史」を中心とした研究会を開いている。今年度のメイン行事となる。

第 2 回研究会は 9 月 13~15 日にかけて青森市の青森県埋蔵文化財調査センターで催された。中心となるテーマは北の境界祭祀遺跡として近年注目されている新田遺跡で、昨年度の奄美研究会との比較の意味でも重要な研究会となり、大きな成果をあげることがで



須藤弘敏氏の報告風景

きた。主たるテーマは、喜界島の城久遺跡の場合同様、この古代末期の北辺遺跡が「律令的かいなか（中央的かいなか）」である。なお第1回に続き、今回も北方交流史科研グループからの助力があり、若干の報告者の追加、コメンテーターの追加等が可能となった。

〈研究会報告〉

初日の午前には、まず新田遺跡の現地見学を行った。残念ながら新幹線関連工事の進展とともに、景観は一変してしまっただが、遺跡の立地状況などは十分把握することができた。

初日午後から研究会に入った。クライナーの開会挨拶、小口の基調報告「新田（1）（2）遺跡特別研究会開催の目的と意義」のあと、最初に発掘調査担当者である木村淳一・葛城和穂氏より成果の紹介があった。それをうけて、佐藤智生氏より考古学からの総括的なコメントがあり、ついで個別遺物の検討に入った。山田雄正氏（北方交流史科研）は「北奥における古代仏教関連遺物の出土とその意義」と題して、新田遺跡で注目を浴びている仏教関連遺物を、東北地方全体の中に位置づけ、新田遺跡の再評価の手がかりとした。また須藤弘敏氏は仏教美術史の立場から、仏像関連遺品について詳細な検討をほどこし、出土遺物の中から新たにいくつかの仏像部品を見だし、仏像5体分の要素がみられること、仁王の一部とみられるものがあることから山門の存在が推定されることなどを興味深く論じた。ついで新田遺跡から出土した日本最北の古代「木簡」について、渡辺晃宏氏が専門家の立場から論じた。結論的には、外見的には木簡の形態をしているが、判然としない墨書が、木簡状の形態となる以前に書かれたものである可能性が高いことなどから、木簡状木製品ではあっても木簡とはいえないことを論じた（では実際に何に使われたのかについては会場からいくつかの見解が示された）。これは小口のかねての見解とも一致し、新田遺跡の再評価に当たっての一つの重要な論点となった。

2日目には、山田祐子氏から「米代川河口域における祭祀の実態」と題して、立地出土品とも似ている近在の秋田の樋口遺跡その他の祭祀関連遺跡についての報告があった。ついで宇部則保氏から「北辺地域における7～10世紀の在地・律令的土器様相」と題して、



新田遺跡群の現状

新田遺跡を含む北東北の土器の様相について、律令的かいなか、という当方の希望に応じた報告があった。以上の北の報告を受けて、次に南の中島恒次郎氏から「考古資料から考える遺跡性格」と題して、大宰府・国府・郡家・集落を土器からどのように区別するかという興味深い報告があった。その観点からすると城久遺跡は律令的色彩が強く、遣唐使関連の基底的要素があることをも示唆された。またカムイ焼きとの比較で、南の視点から見た五所川原須恵器についてもコメントしていただいた。そして最後に昨年度の奄美研究会に出席された南の新里貴之氏、高梨修氏、澄田直敏氏からも全体を通じてのコメントがあった。

総括討論では、さらにさまざまな意見交換がなされ、結果として、この一連の研究が目的とする古代から中世にかけての時期に、日本国家の北辺と南辺に、いわゆる異文化接触はどういう形でおこなわれていたか、どのようなものがあつたか、またその地域の大和民族・文化にどのような影響を及ぼしたのかという問題に一步近づくことができたのではないかなと言える。

研究会終了後は三内丸山遺跡見学班とツガルのカミサマ面談班とに分かれ実地研修を積んだ。また3日目には津軽半島部の古代遺跡（小牧野遺跡・高屋敷館遺跡・五所川原窯跡）を見学し、さらに中泊町博物館で青森県出土の擦文土器を十分に検討した上で、散会となった。

【記事執筆：ヨーゼフ・クライナー（法政大学特任教授）

小口 雅史（法政大学文学部教授）】

Research Report Meeting

**Academic Frontier Sub-project 3:
“Other Cultures within Japan”**

2nd Joint Research Meeting of 2008

Speakers KIMURA Jun'ichi (Aomori City Board of Education)
KATSURAGI Kazuho (Aomori Prefectural Archeological Artifacts Research Center)
SATŌ Tomoo (Aomori Prefectural Archeological Artifacts Research Center)
SUDŌ Hirotohi (Hirotsaki University)
WATANABE Akihiro (Nara National Research Institute for Cultural Properties)
YAMADA Yūko (Akita Prefectural Archeological Artifacts Research Center)
UBE Yasunori (Hachinohe City Board of Education)
NAKASHIMA Kōjirō (Daizaifu City Board of Education)
SHINZATO Takayuki (Kagoshima University)
TAKANASHI Osamu (Amami City Board of Education)
SUMITA Naotoshi (Kikai-chō Board of Education)
Josef KREINER (Hosei University)
OGUCHI Masashi (Hosei University)

Date Saturday, 13- Monday, 15 September 2008

Location Aomori Prefectural Archeological Artifacts Research Center, Aomori City, Aomori Prefecture

The second research meeting of Sub-project 3 was held from 12 to 15 September at the Aomori Prefectural Archeological Artifacts Research Center.

The central theme was the Nitta remains, which have recently been highlighted as a northern-boundary ritual site. The research meeting was also important in that it facilitated a comparison with last year's meeting in Amami, and significant results were achieved. The main question was whether this late-ancient northern-frontier site was under the Ritsuryō legal system (centrally governed), as with the Gusuku remains in Kikai-jima. After visiting and surveying the Nitta site on the first morning, the afternoon was spent in a research meeting. Report titles included: “Why focus on the Nitta remains?”, “Latest excavation results”, “Introducing Buddhist figurines and Buddhist finds”, and “Ancient wooden tablets of the furthest north”. Reports on the second day included: “A comparison of Nitta site with neighboring sites”, “The position of Nitta site within northern Tōhoku”, and “Comparisons with southern boundary sites”. We also saw participation from SHINZATO Takayuki, TAKANASHI Osamu, and SUMITA Naotoshi. We visited the Tsugaru Peninsula site on the third day, and the meeting ended after an examination of Satsumon earthenware found in Aomori Prefecture at the Nakadomari Town Museum.

Report by Josef KREINER (Special Professor, Hosei University) and OGUCHI Masashi (Professor, Faculty of Letters, Hosei University)

研究报告会

学术开拓推进项目③日本内部的异文化

2008 年度第 2 次合同研究会

报告人：木村 淳一（青森县教育委员会）

KIMURA Jun'ichi

葛城 和穂（青森县埋藏文化财产调查中心）

KATSURAGI Kazuho

佐藤 智生（青森县埋藏文化财产调查中心）

SATŌ Tomo'o

须藤 弘敏（弘前大学）SUDŌ Hirotohi

渡边 晃宏（奈良文化财产研究所）

WATANABE Akihiro

山田 祐子（秋田县埋藏文化财产中心）

YAMADA Yūko

宇部 则保（八戸市教育委员会）

UBE Yasunori

中岛恒次郎（太宰府市教育委员会）

NAKASHIMA Kōjirō

新里 贵之（鹿儿岛大学）

SHINZATO Takayuki

高梨 修（奄美市教育委员会）

TAKANASHI Osamu

澄田 直敏（喜界町教育委员会）

SUMITA Naotoshi

约瑟夫·库拉伊那（法政大学）

Josef KREINER

小口 雅史（法政大学）

OGUCHI Masashi

时 间：2008 年 9 月 13 日（周六）—9 月 15 日（周一）

地 点：青森县青森市 青森县埋藏文化财产调查中心

第 3 学术开拓推进项目第 2 次研究会于 9 月 13 日—15 日在位于青森（Aomori）市的青森县埋藏文化财产调查中心召开。会议的中心议题是作为位于北方边界的祭祀遗迹而在近年备受瞩目的新田（Nitta）遗迹。与上一年度的奄美（Amami）研究会相同，本次研究会具有重大意义，同时也取得了丰硕成果。会议的主题是，新田遗迹作为古代末期位于北方边界的祭祀遗迹，是否与位于喜界岛（Kikai Jima）的城久（Gusuku）遗迹一样，具有“律令性（中央性）”。研究会第一天的上午，与会人员参考察了新田遗迹的现场。下午，与会人员研讨，并作了“为何要对新田遗迹进行探讨”、“发掘的最新成果”、“佛像·佛教遗物的介绍”、“最北端的古代木简”等报告。第二天，与会人员作了“新田遗迹与周边遗迹的比较”、“新田遗迹在东北偏北地区的地位”、“与位于南方边界的遗迹之比较”等报告。第三天，新里贵之、高梨修、澄田直敏等人参考察了位于津轻（Tsugaru）半岛的古代遗迹，并前往中泊町（Nakadomari）博物馆，

就青森县出土的擦文(Satsumon)土器进行了研讨。至此，本次研究会圆满结束。

【执笔者：约瑟夫·库拉伊那（法政大学特任教授）
小口 雅史（法政大学文学部教授）】

연구 보고회

학술 프론티어·서브 프로젝트③ 일본 속의
이문화

2008년도 제2회 합동 연구회

- 보고자 木村 淳一 (아오모리시 (青森市) 교육 위원회원) KIMURA Jun'ichi
葛城 和穂 (아오모리현 (青森県) 매장 문화재 조사 센터) KATSURAGI Kazuho
佐藤 智生 (아오모리현 (青森県) 매장 문화재 조사 센터) SATŌ Tomo'o
須藤 弘敏 (히로사키 대학 (弘前大学)) SUDŌ hirotooshi
渡辺 晃宏 (나라 (奈良) 문화재 연구소) WATANABE Akihiro
山田 祐子 (아키타현 (秋田県) 매장 문화재 센터) YAMADA Yūko
宇部 則保 (하치노헤시 (八戸市) 교육 위원회) UBE, Yasunori
中島恒次郎 (다자이후시 (太宰府市) 교육 위원회) NAKASHIMA Kōjirō
新里 貴之 (가고시마 대학 (鹿児島大学)) SHINZATO Takayuki
高梨 修 (아마미시 (奄美市) 교육 위원회) TAKANASHI Osamu
澄田 直敏 (기카이쵸 (喜界町) 교육 위원회) SUMITA Naotoshi
J. 크라이너 (호세이 대학 (法政大学)) Josef KREINER
小口 雅史 (호세이 대학 (法政大学)) OGUCHI Masashi

- 일 시 2008년 9월13일(토) ~ 9월 15일(월)
- 장 소 아오모리현 (青森県) 아오모리시 (青森市) 아오모리현 매장 문화재 조사 센터 (青森県埋蔵文化財調査センター)

제3 서브프로젝트 제2차 연구회가 9월13일~15일에 걸쳐서 아오모리시 소재 아오모리현 매장 문화재 조사 센터에서 실시되었다. 중심 테마는 근년, 북부 경계 제사 유적으로 주목되고 있는 니타 (新田) 유적으로, 지난 해 아오미 연구회와 비교하는 의미에 있어서도 중요한 연구회가 되었으며, 커다란 성과를 올릴 수 있었다. 주된 테마는 기카이지마 (喜界島)의 구스크 (城久) 유적의 경우와 유사한, 이곳 고대 말기의 북부 변방 유적이 「울렁적인가 아닌가 (중심적인가 아닌가)」였다. 첫번째 날 오전에 니타 유적에 대한 현지 견학을 실시한 후, 오후부터 연구회에 들어갔다. 「왜 니타 유적을 거론하는가」 「발굴의 최신 성과」 「불상·불교적 유물 소개」 「최북단 고대 목간 (木簡 - 종이 가 없던 시대에 문자 등을 적은 나무, 번역자주)」 등에 관한 보고가 있었다. 두번째 날에는, 「니타 유적과 주변 유적과의 비교」 「북동북 지역에 있어서의 니타 유적의 위상」 「남부 경계 유적과의 비교」 등에 관한 보고가 있었다. 세번째 날은 신자토 노리유키씨, 다카나시 오사무씨, 스미타 나오토시씨의 안내로 쓰가루 (津軽) 반도 지역의 고대 유적을 견학했으며, 그 외에 나카도마리쵸 박물관 (中泊町博物館)에서 아오모리현에서 출토된 사즈몬 (擦文) 토기를 검토한 후 해산하였다.

【기사 집필: 요세프·크라이너
(호세이 대학 (法政大学) 특임교수)
오구치 마사시
(호세이 대학 (法政大学) 문학부 교수)】

言語関係研究会

「日本の中の諸言語 ― アイヌ・ヤマト・琉球の言語生成 ―」

中川 裕 (千葉大学)

児島 恭子 (早稲田大学)

パトリック・ハインリッヒ (ドイツ・デュイスブルク大学)
現在、琉球大学

中本 謙 (琉球大学)

ヒュー・クラーク (オーストラリア・シドニー大学)
現在、早稲田大学

間宮 厚司 (法政大学)

- 日 時：2008年9月27日(土) 10時00分～17時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 80年館7階角中会議室
- 司会・進行：ヨーゼフ・クライナー (法政大学)
吉成 直樹 (法政大学)

学術フロンティア・プロジェクト『異文化研究としての「日本学」』におけるサブ・プロジェクト③「日本の中の異文化」は、北の東北・北海道と南の琉球諸島という二つの境界領域の文化に目を向けることにより、多層的な日本文化の構造を解明し、日本文化研究に新しい局面を切り拓くことを目的としている。その点を踏まえ、プロジェクトリーダーであるヨーゼフ・クライナー (法政大学) より、今回の言語関係研究会では、その活動の一環として、5名の研究者を招き、アイヌ語と琉球語に関する最新の研究成果を披露したうえで、フリーディスカッションを行う旨、開会のあいさつがあった。

午前の部は、まず間宮厚司 (法政大学) が「アイヌ語とヤマト語をめぐって」という題目で基調報告を行った。アイヌ語はかつて、北海道をはじめ樺太南部・千島列島・本州東北地方北部で話されていたと考えられるが、19世紀まで記録がなかったため、いかなる言語であったのか、詳細は知り得ないものの、縄文時代に日本列島で話されていた言語はアイヌ語の祖先以外に候補はなく、その後ヤマト語が大陸から朝鮮半島を経て弥生文化とともに北九州に入り、日本列島に広まるにつれ、アイヌ語は南から北へと移動させられたと推測できると述べた。次に、中川裕氏 (千葉大学) は「アイヌ語と日本語の位置関係の謎」というタイトルで、言語類型論の研究成果からアイヌ語の特異性は、構造論的な観点からは説明できず、オーストロ

ネシア諸語とアイヌ語の間に、ヤマト語が割って入ったと考えるなど、歴史的な説明が必須であると説く。続いて、児島恭子氏 (早稲田大学) は「アイヌ語への日本 (ヤマト) 文化の影響」というタイトルで、北海道におけるアイヌ語とヤマト語の接触 (12～13、14～16、16～18、19～20の各世紀ごとの状況) を概観した後、アイヌ口承文芸にアイヌ語とヤマト語の対句が見られるなど、日本 (ヤマト) 文化の影響について論じた。そして自由討論を行い、アイヌ語内の方言差がヤマト語内の方言差と比較して小さい理由は、農耕民族でなく狩猟民族であったため、交流が盛んに行われた結果、地理的言語差が進まなかったものと推察される等々、話は多岐にわたった。

午後の部は、同じく間宮厚司の「ヤマト語と琉球語をめぐって」という基調報告から再開された。琉球にはかつて琉球王国 (1429～1879年) が存在し、琉球語とヤマト語は別系統の言語であると明治頃まで思われていたが、比較言語学の研究から同系の言語ということが判明し、現在では日本語の一つの方言とみなされている。ヤマト語と琉球語が分離したのは弥生時代後期で、九州から琉球への移住が何度かあって、それが独自に発展していったとの説があり、有力視されている。しかしながら、琉球語は文献資料が15～16世紀にならないと現れないため、その言語の歩みは不明であると言わざるを得ない。最初に、パトリック・ハインリッヒ氏 (琉球大学) が「琉球言語史に歴



史を加える」で、沖縄では狩猟採集社会から農業社会へ移行した9世紀頃を琉球語の言語形成期と考える。次いで、中本謙氏（琉球大学）は「琉球方言八行子音」で、琉球語に現れるパナ（鼻）などのP音は、古代の音が残存したものとされる通説に対し、単語によっては新たに生まれたP音も存在するのではないとする見解を示した。最後に、ヒュー・クラーク氏（早稲田大学）は「琉球語研究のいくつかの問題点」で、琉球諸方言の特徴と位置づけについて解説するとともに、『おもろさうし』の語学的な課題についても

述べた。自由討論では、人々の移動（狩猟）と定着（農業）による言語生成のプロセス、『おもろさうし』の言語はヤマト語と共通性が多く比較的新しいのではないかといった提言など、活発な意見交換がなされた。

今後は、今回の言語研究会の成果を、考古学等の研究結果と重ね合わせ、そこから何が言い得るか、重層的かつ総合的に考究する必要があるだろう。

【記事執筆：間宮 厚司（法政大学文学部教授）】

Research Report Meeting

Academic Frontier Sub-project 3: “Other Cultures within Japan”

Language-related Research Meeting: “The Languages within Japan: Ainu, Yamato, and Ryūkyū Lan- guage Generation”

Speakers NAKAGAWA Hiroshi (Chiba University)
KOJIMA Kyōko (Waseda University)
Patrick HEINRICH (Duisburg University, Germany) (currently Ryūkyū University)
NAKAMOTO Ken (Ryūkyū University)
Hugh CLARK (Sydney University, Australia) (currently Waseda University)
MAMIYA Atsushi (Hosei University)

Date Saturday, 27 September 2008, 10:00-17:00

Venue Hosei University Ichigaya Campus, '80 Building 7F conference room

Chair/Coordinator Josef KREINER (Hosei University)
YOSHINARI Naoki (Hosei University)

The language-related research group, part of Sub-project 3: “Other Cultures within Japan”, invited five scholars from inside and outside Japan, who spoke on the subject: “The Languages within Japan: Ainu, Yamato, and Ryūkyū language generation”. The results of recent re-

search into Ainu and Ryūkyū languages were shared, and free discussion ensued. Presentation titles were as follows:

MAMIYA Atsushi “On Ainu and Yamato languages”
NAKAGAWA Hiroshi “The puzzle of the Ainu and Japanese languages’ positional relationship”
KOJIMA Kyōko “The influence of Japanese (Yamato) culture upon the Ainu language”
MAMIYA Atsushi “On Yamato and Ryūkyū languages”
Patrick HEINRICH “Applying history to the Ryūkyū language history”
NAKAMOTO Ken “The ‘ha’-line syllables’ consonants in Ryūkyū dialect”
Hugh CLARK “Various issues in Ryūkyū language research”

There was a lively exchange of views during the free debate following the reports. Suggestions included considering the process of language generation in relation to the movement of peoples (hunter-gathering) and to static living (farming). It was also suggested that the language of the Ryūkyū classical work, Omorosōshi (Compilation of ancient festival songs) has many common features with Yamato language, and may be comparatively recent. It will be necessary at the next meeting to relate archeological results etc. to the language research of this meeting, undertaking multi-layered and integrated research before we can come to any conclusions.

Report by MAMIYA Atsushi (Professor, Faculty of Letters, Hosei University)

研究报告会

学术开拓推进项目③日本内部的异文化

语言方面研究会

“日本内部的各种语言——阿伊努・大和・琉球的语言生成——”

报告人：中川 裕（千叶大学）
儿岛 恭子（早稻田大学）
帕特里克・海因里希（Patrick HEINRICH）
（德国・杜伊斯堡〈Duisburg〉大学）（现
任职于琉球大学）
中本 谦（琉球大学）
休・克拉克（Hugh CLARK）（澳大利亚・
悉尼大学）（现任职于早稻田大学）
间宫 厚司（法政大学）
时 间：2008年9月27日（周六）10:00 17:00
地 点：法政大学市ヶ谷校区 80 年馆 7 层角中会
议室
主持人：约瑟夫・库拉伊那（Josef KREINER）（法
政大学）
吉成 直树（法政大学）

第3学术开拓推进项目“日本内部的异文化”的语
言方面研究会于2008年9月27日（周六）召开。本次

研究会邀请了国内外5名研究者，围绕着“日本内部
的各种语言——阿伊努・大和・琉球的语言生成”这一主题，
分别介绍了关于阿伊努语和琉球语的最新研究成果，并
进行了自由讨论。与会的5名研究者的演讲题目如下：

间宫 厚司（MAMIYA Atushi）“阿伊努语与大和语”
中川 裕（NAKAGAWA Hiroshi）“阿伊努语与日本
语的位置关系之谜”
儿岛 恭子（KOJIMA Kyōko）“日本（大和）文化对
阿伊努语的影响”
间宫 厚司（MAMIYA Atushi）“阿伊努语与琉球语”
帕特里克・海因里希“琉球语言史的历史背景”
中本 谦（NAKAMOTO Ken）“琉球方言中的 ha 行
子音”
休・克拉克（Hugh CLARK）“琉球语研究中的若干问题”
在报告结束后的自由讨论中，与会人员就伴随着人
口的移动（狩猎）与固定（农业）而发生的语言生成的
进程、由琉球的古典文学《神歌草纸》的语言与大和语
有许多共通性是否可以认定其成书年代较近等问题，热
烈地交换了意见。与会人员认为，在今后的研究中，有
必要将本次语言研究会的成果与考古学等领域的研究成
果相结合，并分析其中所包含着的有用信息，以进行多
层次、综合性的考察。

【执笔者：间宫 厚司（法政大学文学部教授）】

연구 보고회

학술 프론티어・서브 프로젝트③ 일본 속의 이문화

언어 관계 연구회

「일본 속의 제언어——아이누・야마 토・류우큐우의 언어 생성——」

- ・보고자 나카가와 히로시씨（中川 裕）、치바
대학（千葉大学）
고지마 쿄고씨（児島 恭子）、와세
다 대학（早稻田大学）
패트릭 하인리히씨（Patrick HEIN-
RICH）、(독일・듀이스부르크〈Duis-
burg〉대학、현재, 류우큐우 대학（琉
球大学）)
나카모토 켄씨（中本 謙）、류우큐
우 대학（琉球大学）
휴 크라크씨（Hugh CLARK）、(오스트
레일리아・시드니대학、현재, 와세다
대학（早稻田大学）)
마미야 아츠시씨（間宮 厚司）、호세
이 대학（法政大学）
- ・일 시 2008년 9월 27일（토）10시:
00~17시:00
- ・장 소 호세이 대학（法政大学）이치가야（市
ヶ谷）캠퍼스 80년관 7층 각중회의
실
- ・사회・진행 요세프・크라이너씨（Josef KREIN-
ER）호세이 대학（法政大学）
요시나리 나오키씨（吉成 直樹）
호세이 대학（法政大学）

2008년 9월 27일（토）、서브 프로젝트③「일본 속
의 이문화」내의 언어 관계 연구회가、국내외로부터 5
명의 연구자를 초빙하여、「일본 속의 제언어—아이누・
야마토・류우큐우의 언어 생성—」이라는 제목으로 실
시되어、아이누어와 류우큐우어에 관한 최신의 연구
성과 발표와、프리 디스커션을 갖았다. 강연의 제목
은 아래와 같다

間宮厚司（MAMIYA Atushi）「아이누어와 야마토어에
관하여」
中川 裕（NAKAGAWA Hiroshi）「아이누어와 일본어
의 위치 관계의 비밀」
児島恭子（KOJIMA Kyōko）「아이누어에 미친 일본（야
마토）문화의 영향」
間宮厚司「야마토어와 류우큐우어에 관하여」
패트릭 하인리히（Patrick HEINRICH）「류우큐우어 언
어사에 역사를 덧붙이다」
中本 謙（NAKAMOTO Ken）「류우큐우 방언 ‘하’ 행
자음」
휴 크라크（Hugh CLARK）「류우큐우어 연구에 있어서
의 몇몇 문제점」

보고 후에 이루어진 자유 토론에서는 사람들의 이동
（수렵）과 정착（농업）에 의한 언어 생성 프로세스와、
류우큐우의 고전 문학『오모로소시』（『おもろそし
し』）에 쓰여진 언어는 야마토어와 공통점이 많으며、
비교적 새로운 언어로 보인다는 제언 등、활발한 의견
교환이 이루어졌다. 금후、이번 언어 연구회의 성과를
고고학 등의 연구 결과와 연계한다면 어떤 결과가 도출
될 것인지, 중층적이고 종합적인 연구가 요구된다.

【기사 집필：마미야 아츠시（間宮 厚司、
호세이 대학（法政大学）문학부 교수）】

「東アジア読書共同体の構築は可能か？」

- 日 時：2009年1月16日（金） 13時00分～18時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26階A会議室
- 主 催：東アジア出版人会議・法政大学国際日本学研究所

コンセプト共有へ講演・報告・討論

日本や中国（香港、台湾）、韓国の人文分野の出版編集にかかわる人たちの国と地域の異文化の壁を超える「読書共同体」コンセプト確立のための相互理解を深める貴重な機会として、各国持ち回りで開かれている東アジア出版人会議主催のシンポジウムが2009年1月16日（金）、東京・市ヶ谷の法政大学で開催された。今回は日本の担当であり、法政大学国際日本学研究所が共催した。今回のテーマは「東アジア読書共同体の構築は可能か？」。シンポ開始から6時間、報告者を含めて30人余の熱気が会場に満ちた。

基調講演は、市村弘正・法政大学法学部教授による「読むということ～一介の読書人の感想」。引き続き基調報告したのは、香港、台湾、韓国、日本から一人ずつ。韓喆熙・韓国トルペグ出版社代表「韓国の人文出版の歴史と現状から」▽林載爵・台湾聯経出版社発行人・総編集「出版から戦後台湾の思想変遷を見る」▽陳万雄・香港出版総会会長（香港聯合出版集團總裁）「東アジア読書共同体の構築の可能と困難」▽龍澤武・前平凡社編集局長「人文書の危機をふまえて」以上4氏。このほかシンポ後半のパネル討論・一般討論には、韓国4氏、中国・（香港）・日本各1氏が新たに参加した。7氏は、金彦鎬・韓国ハンギル社代表▽姜マクシル・韓国四季節社代表▽韓性峰・韓国東アジア出版社代表▽林慶澤・韓国全北大学教授▽董秀玉・中国編集学会副会長・三聯書店前総経理▽馬健全・中国一石文化編集総監▽守田省吾・みすず書房編集部長。司会は東アジア出版人会議理事の加藤敬事氏と法政大学国際日本学研究所教授の王敏が交代で担当した。

「読書共同体」という言葉を抜群の造語力によって

最初に使ったのが今回基調報告された龍澤氏であることはよく知られている。朝鮮半島における日本勢力による侵略「壬辰倭乱」「丁酉再乱」（日本史における「文禄・慶長の役」）を記録した李氏朝鮮の柳成龍の記録『懲毖録』が翻訳されてから60数年後に日本で早々に出版されたことから、17世紀当時、歴史的に東アジアには中国文化を軸にして共有文化が存在したことは否定できない。東アジア全体に通じる普遍的価値観があったと考えられる。共通した本を読みあうことのすばらしさを再認識する出来事だと思われる。

基調講演に立った市村氏は経験をよりどころに歴史と国境を超えた読書の普遍性に言及した。「読書の普遍性とは諸条件の壁を問題にしない力を持ちうるものだ」と言い切る。「読書」に潜在する限りない知性と、社会変革のパワーと、自他認識の可能性を鋭く指摘している。

4氏による基調報告はいずれも読書力を踏まえた当然のような持論を進展させていた。韓喆熙氏は、人文書の民主化運動への貢献がみられた80年代から廃れた90年代への出版界の変化を嘆いたが、いまだ保守化や経済不安が人文書を必要とする状況が復活していると分析した。

林載爵氏は戦後の台湾思想界を大きく3期（1950年代以降・1980年代・1990年代以降）に分け、2期目の80年代に出版の果たした功績を紹介した。とくに人権面の基礎の認識を植えたのは地味な活字文化であったという。思想・思考の重要性を強調したもので、周辺・隣国と相互に共通した流れであったと思われる。東アジアという領域を突き動かすエネルギーがあったのかもしれない。「読書共同体」につながるものであろう。

グローバルな視点と絡ませて東アジア読書共同体の可能性に迫ったのが陳万雄氏である。東アジアを結びつけたコンセプトは漢字文化圏あるいは儒教文化圏であったという。ところが西洋との出会いで、それらは歴史に変わった。しかし、歴史が積み上げたものが簡単に消えるはずがなく、「東アジアに共通した読書共同体の再構築は可能」だと言い切った。

こういっても、陳万雄氏は没個性的な共有を想定していない。「東アジアの三力国は文化を融合しつつ発展させて、伝統の文化をもつことができた」という。異文化の視点を抜きに



市村弘正氏の基調講演風景

「読書共同体」を考えられないことも強調した。「歴史的にみれば、原点が中国から始まった。日本も韓国も、長い歴史を経て中国文化と融合し、変化することで伝統文化になった」と、固有の文の形成にいたるベクトルを見逃していない。

最後に董秀玉氏は「東アジア読書共同体の構築をめぐる認識を深化させ、活動を発展させていくには、関連の学術研究の成果が必要としている。法政大学国際日本学研究所の研究活動と連動させ、東アジア読書人会議の今後の展開を広がりつつ深めていきたい」と、期待を述べた。

読書共同体の概念は言葉が先行しているきらいがあるかもしれない。パネル討論でもいくどもこの言葉を越えた先にあるところに触れられ、発言されたが、発言者を取り巻く地域性の違いによってイメージに微妙な差異があるように思われた。しかし、その重要性を否定する意見や考えが出たわけではない。むしろ構築の必要性が再認識されたという共通の認識が一層明らかになった。



会場風景

東アジアの国・地域の文化は固有の歩みを持つ。互いに普遍性に立ち、独自性を尊重しあって読書共同体の構築に共同歩調をとる大切さを感じ取ったというのが今回のシンポの成果でもあったように思われる。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】

Co-hosted Symposium: Report

“Can we Build an East Asian Reading Community?”

Sponsors East Asia Publishers Conference;
Hosei University Research Center for
International Japanese Studies
Date Friday, 16 January 2009, 13:00 – 18:00
Venue Hosei University Ichigaya Campus,
Boissonade Tower 26F Conference
Room A

The co-hosted symposium, held on 16 January 2009 at Hosei University, Tokyo, aimed at establishing the concept of a “reading community” by which publishers and editors in the field of humanities in countries such as Japan, China (Hong Kong, Taiwan) and Korea transcend cultural boundaries between countries and regions. The Hosei University Research Center for International Japanese Studies provided the venue and assisted in the organization. The theme was: “Can we build an East Asian reading community?” The hall abounded with the enthusiasm of the 30-odd participants, including the speakers, throughout the six-hour symposium.

The keynote address referred to the universality of

reading that transcends history and borders. Following on, we heard keynote reports by speakers from Hong Kong, Taiwan, Korea and Japan. This included RYŪSAWA Takeshi, Chief Editor of Heibonsha, who was the first to use, and indeed, showed great distinction in coining, the term “reading community”. Four more participants from Korea and one each from China and Japan joined in the panel discussion during the second half of the symposium.

The four keynote reports all advanced theories based on the power of reading. Chair of Sino United Publishing of Hong Kong, CHAN Man-hung, impressed us with a report emphasizing the potential for an East Asian reading community involving a global view. He affirmed the “possibility of rebuilding a reading community common within East Asia”.

The cultures of the countries and regions in East Asia are peculiar to each. As a result of this symposium, we agree that we sensed the importance of taking shared steps to build a reading community which exists in universality, while respecting each other’s identities.

Report by WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

共同研讨会报告

“构筑东亚读书共同体的可能性”

主办方：东亚出版人会议・法政大学国际日本学研究所

时 间：2009年1月16日（周五）13：00—18：00

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 26层 A 会议室

2009年1月16日，来自日本、中国大陆及香港和台湾地区、韩国的人文图书出版编辑领域的有关人士在东京・法政大学召开了题为“构筑东亚读书共同体的可能性”的研讨会。此次研讨会由东亚出版人会议和法政大学国际日本学研究所共同主办。在长达6个小时的会议上，包括报告人在内的30多位与会人士，围绕着如何跨越国家及地区间异文化的鸿沟从而实现“读书共同体”构想这一话题，展开了热烈的讨论。

会议的基调演讲指出，“读书”具有超越历史和国

界的普遍性。随后，最初使用“读书共同体”一词的平凡社前编辑局长龙泽武以及分别来自中国香港和台湾地区、韩国、日本的各一位代表作了基调报告。在会议后半程的专题讨论中，来自韩国的4位代表和来自中国、日本的各一位代表也参与到讨论中。

4位代表所作的基调报告均强调有必要进一步提高人们的阅读能力。香港出版总会会长陈万雄在报告中指出，必须在全球化的视野下来审视东亚读书共同体的可能性。这一观点得到了与会人员的普遍赞同。会议得出结论认为，在东亚范围内重新构筑彼此共通的读书共同体是完全可能的。

东亚各国・地区的文化均有其固有的发展轨迹。因此，在既立足于普遍性又相互尊重彼此独特性的基础上，以共同的步调来构筑读书共同体是极为重要的。通过此次研讨会，与会人员对于这一点均有了更进一步的认识。

【执笔者：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

공동 심포지움 보고

「동아시아 독서 공동체의 구축은 가능한가?」

- ・주최 동아시아 출판인 회의・호세이 대학 (法政大学) 국제 일본학 연구소
- ・일시 2009년 1월 16일 (금) 13시:00 ~ 18:00
- ・장소 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 26층 A회의실

일본, 중국 (홍콩, 대만), 한국의 인문 분야 출판 편집 관계자들을 초빙하여, 국가와 지역의 이문화의 벽을 넘어, 「독서 공동체」 컨셉트의 확립을 위해, 동아시아 출판인 회의가 주최한 심포지움이 2009년 1월 16일, 도쿄・호세이 대학에서 개최되었다. 이번 심포지움에 회의장을 제공한 호세이 대학 국제 일본학 연구소가 공동 개최 계획에 참가했다. 테마는 「동아시아 독서 공동체 구축은 가능한가?」로, 6시간에 걸친 심포지움 회의장은 시중, 보고자를 비롯해서 30여명에 이르는 참가자의 열기로 가득했다.

기조 강연에서는 역사와 국경을 초월한 독서의 보편

성에 관해 언급되었다. 기조 강연 후, 발군의 조어력으로 「독서 공동체」라는 단어를 최초로 사용한 전 해본샤 (平凡社) 편집국장 류사와 다케시 (龍澤武) 씨를 포함하여, 홍콩, 대만, 한국, 일본측으로부터 한 사람씩 기조 보고가 있었다. 심포지움 후반에 있는 패널 토론에는 한국에서 4명, 중국・일본에서 각 1명씩 새로이 참가했다.

기조 보고에서는 네 사람 모두 독서력에 관한 지론을 펼쳤다. 홍콩 출판 총회 회장인 진만웅 (陳万雄) 씨의, 글로벌 시점과 연계한 동아시아 독서 공동체의 가능성에 관한 보고는 깊은 감명을 주었다. 진만웅씨는 「동아시아에 공통되는 독서 공동체 구축은 가능하다」고 명언했다.

동아시아 국가・지역의 문화는 고유의 행보를 보여왔다. 상호 보편성에 입각하여, 서로의 독자성이 존중되는 독서 공동체의 구축을 위해서는, 공동 보조가 중요하다라는 것을 깨달았다는 점이 이번 심포지움의 성과이다.

【기사 집필: 왕민

(王敏, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수)】

2008 年度第 4 回東アジア文化研究会

「台湾における日本研究～日本文化史研究から考える～」

徐 興慶（台湾大学日本語学科教授）

- 日 時：2008 年 7 月 7 日（月）18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 25 階 B 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

去る 2008 年 7 月 7 日（月）、法政大学ポアソナードタワー 25 階 B 会議室（東京・千代田区）において、2008 年度第 4 回東アジア文化研究会が開催された。今回は台湾大学日本語学科教授の徐興慶氏をお招きし、「台湾における日本研究：日本文化史研究から考える」と題する報告が行われた。

徐氏は 1956 年生まれ。東呉大学東方語文学系を卒業後日本に留学し、1992 年に九州大学で文学博士の学位を取得。これまでに中国文化大学日本語学科主任・日本研究所所長、台湾日本語学会副会長などを歴任し、2008 年 8 月 1 日からは台湾大学日本語学科主任・日本語文研究所所長に就任する予定である。近著に『朱舜水思想交流論考』（台湾大学出版中心、2008 年）、『近代中日人物與思想交流的新群像』（台湾大学出版中心、2008 年）などがある。

今回の報告では、①台湾における日本研究の変遷、②日本研究の機構とその内容、③大学の教育から見た日本文化史研究、④国際化を巡る台湾の日本研究、の四つの観点から、台湾における日本研究の現状と問題が提起された。各点の要旨は以下の通りである。

① 台湾における日本研究の変遷

台湾における日本研究は、1952—1972 年の第一期と、1973—2003 年の第二期に分けることができる。

第一期である 1952—1972 年の日本研究の特色は、政治・外交・経済などの政情分析を中心とし、明治維新、西洋文明の吸収、近代化と改革、帝国主義の本質と対外侵略への批判などが行われた点にある。また、a) 系統性と組織性に乏しい、b) 日本との学術交流の推進が難しい、c) 学術研究よりも対日政策の実行への有効性が優先される、という点にも、この時期の日本研究の特質があった。

第二期である 1973—2003 年には、研究対象が学

術・文化・教育などの分野に拡大した点に日本研究の特色がある。しかし、日本研究の人材を育成するための研究機関、大学間の連携や整合性の確保などが難しいという問題もあった。

一方、1995 年に設置された日台交流センターは、双方の歴史研究者の招聘や学術書、論文集の発行などで一定の成果を挙げている。

② 日本研究の機構とその内容

台湾において日本研究を中心的に進めている大学は台湾大学のほか、中国文化大学、淡江大学、輔仁大学、政治大学である。

このうち、中国文化大学の日本研究の成果は 2004 年度までに 295 編の論文としてまとめられており、同じく淡江大学でも 2004 年度までに 288 編の論文が執筆されている。なお、中国文化大学の主な研究分野は政治外交、植民地、歴史・思想及び宗教、日本文学などであり、淡江大学では社会、経済、企業管理、教育、思想史などが主たる研究分野である。

台湾大学では、日本語文学系が主催する日本研究講演会を開催しており、1999—2004 年度に述べ 41 回の講演が行われた。また、2002—2005 年に行われた「東亜文明研究中心」プログラムでは 2003—2004 年にかけて日本研究活動の一環として、日本人研究者などによる講演会を 21 回開催した。

台湾大学における日本研究の特色の一つが日本漢学研究である。文学院及び東亜文明センターを中心として 2001 年から「日本漢文学研究」という国際シンポジウムが開催されており、2008 年 3 月には台湾大学の文学院と二松学舎大学 COE プログラムの共催で第 5 回目を開催した。毎回規模が拡大しており、今回は日本から参加者約 20 名を含む、ベトナム、フランス、ベルギー、韓国など各国から研究者が集まった。



徐 興慶氏



③ 大学の教育から見た日本文化史研究

台湾大学、輔仁大学に提出された修士論文やレポートの内容をみると、「古代日本人の死霊館」「両墓制」「天を祭る儀式」といったものから「国民的宗教の成立」「一揆における集団意識」「江戸時代における食生活の変遷」といった話題まで多岐にわたる。

ただし、原典、とりわけ近代以前の文献を読解するという点で学生の能力は必ずしも十分ではなく、そのため学生独自の視点は乏しくなりがちである。

また、現在、台湾では46の大学が日本語学科及び応用日本語学科を設置している。しかし、古典を扱うのは台湾大学のみで、他の大学はほぼ近現代の日本を対象としている。この点も、学生の原典読解能力を涵養する際の障害となっている。

④ 国際化を巡る台湾の日本研究

「何故日本研究を行う必要があるのか」という問いに対しては、a) どうすれば日本と良好な関係ができるか、b) 日本民族の閉鎖性及び対外意識を理解する、c) 「運命共同体としての日本と台湾」という課題の解決、が求められるからである。

今後の台湾における日本研究の展望としては、a) 研究の焦点を絞って水準を上げる、b) 人材の育成と

短期、中期、長期の研究計画の策定、c) 日本研究の奨励制度をつくり、優秀な研究者を育成する、ということが必要となる。

そして、将来的には台湾における日本研究の拠点として「台湾日本総合研究中心」を設立するとともに、日本と文化交流を促進させるよう、積極的に働きかけることが重要になるだろう。

本報告の後に質疑応答が行われたが、その中で「台湾日本総合研究中心設立の現実性」や、「民進党から国民党に政権が変わった現在の台湾では日本研究が冬の時代を向かえるのではないか」といった指摘がなされた。これに対し、徐氏は、台湾日本総合研究中心の設立が決して容易ではないことを認めつつ、それでも日本研究者たちが努力しなければならないし、日本の関係者の協力も不可欠であるとの認識を示した。

この質問への回答からも明らかのように、今回の報告では、「外国における日本研究の促進のためには日本の研究者の努力が不可欠である」という根本的な課題の重要性が改めて確認されたといえるだろう。

【記事執筆：鈴木 裕輔

(法政大学国際日本学研究所客員学術研究員)】

East Asian Culture Research Meeting:
report

Academic Frontier Sub-project 2: Japan
as an 'Other' Culture

4th East Asian Culture Research
Meeting of 2008

“Japan Research in Taiwan:
From the Perspective of Research
in Japanese Cultural History”

Speaker SHYU Shing-Ching (Professor, Department of Japanese Language and Literature, Taiwan University)
Date Monday, 7 July 2008, 18:00-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 25F Conference Room B
Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In this report, Professor Shyu Shing-Ching examined the present state of, and issues surrounding, Japan research in Taiwan from the following four standpoints.

Firstly, regarding changes in Japan research in Taiwan, we were shown how Taiwanese Japan research can be divided into a first phase 1952-1972, and a second phase 1973-2003. During the second phase, the focus of research expanded into the fields of academia, culture and education etc. We were then introduced to the five universities in Taiwan, including Taiwan University, which are concentrating on advancing Japan research. Despite a wide range of research areas, students' inadequate ability at reading pre-modern texts was a characteristic of Japanese cultural history research, as observed in the university teaching environment. This meant that students' own arguments tended to be thin. Finally, as the outlook for forthcoming Japan research in Taiwan, it was deemed necessary a) to narrow research focus, and raise standards, b) to design training for human resources, and short, mid and long-term research projects, and c) to create a system of encouragement for Japan research, and nurture excellent researchers. For the future, it is important to make positive moves upon governments to achieve ties of cultural cooperation between Taiwan and Japan.

Report by SUZUMURA Yūsuke (Visiting Academic Researcher, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

东亚文化研究会报告

学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2008年度第4次东亚文化研究会 “台湾的日本研究——对日本文化史研究的思考”

报告人：徐 兴庆（台湾大学日语学科教授）

时 间：2008年7月7日（周一）18：30－20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 25 层 B 会议室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

徐兴庆教授在本次报告会上，主要从以下四个方面介绍和分析了台湾的日本研究现状和存在的问题。

徐兴庆教授首先指出，台湾的日本研究在历史变迁的过程中，主要可以划分为 1952 年－1972 年和 1973 年－2003 年这两个阶段。而在第二阶段，研究的对象逐步扩大到学术・文化・教育等各领域。

随后，徐兴庆教授介绍了在台湾，包括台湾大学在内的 5 所大学将日本研究作为核心课题加以研究的有关情况。

接着，徐兴庆教授分析指出，通过在大学教育第一线的观察可以发现，在日本文化史研究领域的一个重要特征就是，学生的研究对象虽然多种多样，但是由于对近代以前的文献的解读能力不足，从而容易导致学生缺乏自己独特的视角。

最后，徐兴庆教授对台湾今后的日本研究进行了展望，认为必须对以下 3 个方面加以强化：a) 对研究的内容加以聚焦和浓缩，不断提高研究水平；b) 重视人才的培养和短期、中期、长期研究计划的制定；c) 创建日本研究的奖励制度，以培养优秀的研究者。徐兴庆教授同时还指出，在未来，研究者们必须积极地对政府开展工作，以促进台湾与日本的文化交流。

【执笔者：铃村 裕辅

（法政大学国际日本学研究所客员学术研究员）】

동아시아 문화 연구회 보고

학술 프론티어 서브 프로젝트 ② 이문화로서의 일본

2008년도 제4회 동아시아 문화 연구회 「타이완에 있어서의 일본 연구——일본 문화사 연구 시점에서 고찰함——」

보고자 徐 興慶씨(타이완 대학 일본어학과 교수)

・일시 2008년 7월 7일 (월) 18시 30분～20시 30분

・장소 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 25층 B 회의실

・사회 王 敏 (호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수)

본 보고에서 徐興慶교수는 이하와 같은 4 가지 관점에서, 타이완에 있어서의 일본 연구의 현황과 문제를 검토했다. 첫번 째로, 타이완에 있어서 일본 연구의 변천사는 1952년-1972년을 제 1기, 1973년-2003년

을 제 2기로 분류할 수 있다. 제 2기에는 연구 대상이 학술, 문화, 교육등의 분야로 확대된 것이 특징이다. 다음으로는 타이완에서 일본 연구를 중심으로 진행하고 있는 타이완 대학을 포함한 5개 대학에 관해서 소개되었다. 그리고 대학의 교육 현장에서 본 일본 문화사 연구의 특징으로서, 학생들이 연구대상은 다양하지만 근대 이전의 문헌을 해석하는 능력이 불충분하며, 그로 인해 연구에 관한 학생들의 독자적인 시점이 빈약하다는 점이 지적되었다. 마지막으로 향후 타이완에 있어서 일본 연구의 전망으로서 a) 연구의 초점을 압축하여 수준을 높인다. b) 인재 육성과 단기, 중기, 장기적 연구 계획의 책정 c) 일본 연구를 대상으로 장학 제도를 만들어 우수한 연구자를 육성할 필요가 있다는 결론을 도출하였고, 장래에 있어서는 타이완이 일본과 문화 협정을 맺을 수 있도록 정부의 적극적인 참여가 중요하다는 점이 지적되었다.

【기사 집필: 스즈무라 유스케 (鈴村裕輔,

호세이 대학 국제 일본학 연구소 객원 학술 연구원)】

学術フロンティア・サブプロジェクト② 異文化としての日本

2008年度第5回東アジア文化研究会

「韓流をどう位置づけるか～日韓間の政治と文化の文脈の中で」

小針 進（静岡県立大学国際関係学部教授）

●日 時：2008年8月1日（金）18時30分～20時30分

●場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26階A会議室

●司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

1. 韓流は突然発生したのか？

70～80年代にかけて李成愛、吉屋潤、趙容弼、羅勲児、桂銀淑、金蓮子などによる韓国歌謡が日本で成功をおさめた。韓国映画ファンも80年代には一定

の層が存在していた。80年代前半の韓国大衆文化への関心は、88年のソウル五輪の開催と経済成長によって、「異文化としての韓国」がクローズアップされるようになったことが背景にある。また、80～90

年代には、顕著となってきた日本人のアジア志向とも関係があらう。映画『八月のクリスマス』、『シュリ』、『JSA』などが、「韓流現象」が言われる直前に日本で注目を集めたり、興行的に成功したのは、こうした流れのなかである。98年から段階的に金大中政権が行なってきた日本大衆文化の開放措置や、目前に迫っていた2002年W杯日韓共催など、友好ムードの政治的、社会的な背景もある。グルメ、ショッピング、美容、IT（情報技術）など、あらゆる面で「韓国ブーム」のような現象が見られた。

2. 日本における韓流の特徴

「韓国ブーム」が「韓流現象」に変わり始めたのは、W杯の翌年である03年からと言ってよいだろう。W杯の成功は、両国国民の相互意識向上をもたらした。

韓流現象が03年からだというのは、同年4月からNHK衛星放送（BS）で『冬のソナタ』が始まったことに端を発する。「冬ソナ」ブームと「ヨン様」人気をもたらした。劇場公開された映画『猟奇的な彼女』の大ヒット、歌手BoAのCDが売り上げでトップ10に入ったのも同年であった。一方、「ヨン様」人気の過熱ぶりやその反復報道は異常ですらあった。「ドラマの内容にリアリティがない」という指摘もあった。ただ、戦後の日韓関係においては画期的な出来事だと評価して良い。日本人拉致を認めた北朝鮮への厳しい視線が集中する時期でもあり、日本と朝鮮半島の歴史のなかで国民感情が南と北に向けてはとても異なる時代だったと後に記録されるであろう。05年春以降に竹島問題などで両国の政治・外交関係が急激に悪化しても韓流は残った。熱狂的なブームは去っても、日本におけるエンターテインメントのジャンルとしての韓流が固まったと言ってよい。

3. 韓流と政治

小泉元総理は在任中に韓流を我田引水式に評価してきたようなフシがある。06年9月、退任の際のインタビューで、「中国、韓国とも交流をあらゆる分野で広げた。自らの対中韓外交はあとで評価されると思う」を述べた。まるで韓流を含む大衆文化交流の拡大が自らの手柄であるかのような物言いだった。小泉元総理のおかげで韓流ブームが日本で起こったわけではない。韓流現象を過大評価してこの面だけで日韓関係全般が良好だと思ひ込んでしまうのは正しくない。小泉元総理のように、悪化した政治・外交関係を度外視して、その他の交流だけで両国関係を評するのは、正確ではないのである。

一方、韓国の為政者はどうであったか。05年春に

竹島問題が浮上して両国の政治・外交関係が急激に悪化してから、盧武鉉前大統領は日本人を刺激する発言を繰り返した。韓流現象などで大衆文化交流や人的交流が日韓間で史上最大規模となっているなかで、良好な人的交流を過小評価して、政治・外交関係だけで相手国を評価する発言を繰り返した盧武鉉前大統領は、韓流でいつになく日本人の目が韓国に向くなかで、自国をPRするセンスがないと言える。

ところで、ある国の大衆文化への接触経験がある人のほうが、ない人よりも、その国に対する親近感の度合いが高いことは、いくつかの研究結果で明らかになっている。つまり、大衆文化接触と対象国への親近感には相関関係がある。ただ、ある国の大衆文化へ接触しても、政治・外交面でその国のシンパを作り出すかどうかはわからない。結論を言えば、対象国への宥和的な態度を形成するわけではない。ある国への態度は、様々な要素が合わさって形成されるのだから当然である。

4. 韓流とナショナリズム

韓国社会は韓流を、経済的な波及効果や国家イメージの向上としてとらえる面がある。韓流が韓国人のナショナリズムを刺激していると言ってよい。日本の韓流現象を見る韓国社会の目は概して好意的ではある。ただ、政治外交面での日韓関係の悪化以降は、ペ・ヨンジュンの活躍さえ、反日ナショナリズムからとらえる視点も出てくる。日本での受けを狙うあまり、韓国文化が日本におもねって「隷属」してしまうといった論がそれである。

一方、日本社会においても韓国のプレゼンスが大きくなれば、韓国への異議申し立てが発生する。これは自然なことであり、「嫌韓流」は発生すべくして発生したともいえる。

日韓両国間において、政治・外交と文化・人的交流の間は無関係ではない。政治・外交面の対立が少なければ、相互認識は良好になる。対立が多ければ、相互認識は悪化する。ただ、政治・外交面が緊張したとしても、文化・人的交流面がそれに比例して急激に冷え込む構造ではなくなってきた。同時に、政治・外交の「統制」が不可能だからこそ、日本では「嫌韓」と韓国では「アンチ日本」が、個人のなかで頭をもたげやすい。韓流現象（日本）や日本大衆文化ブーム（韓国）などが起こる一方で、相手国側を刺激しうるナショナリスティックな動きが顕著に起こるのが近年の特徴である。

【記事執筆：小針 進（静岡県立大学国際関係学部教授）】



East Asian Culture Research Meeting: report
Academic Frontier Sub-project 2: Japan as
an 'Other' Culture

5th East Asian Culture Research
Meeting of 2008

“How do we account for the ‘Korea
Boom’? : Within the Context of
Japan-Korea-related Politics
and Culture”

Speaker KOHARI Susumu (Professor, Faculty of
International Relations, University of
Shizuoka)
Date Friday, 1 August 2008, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus,
Boissonade Tower 26F Conference
Room A
Chair WANG Min (Professor, Hosei Universi-
ty Research Center for International
Japanese Studies)

Professor Kohari discussed the “Korea Boom Phe-

nomenon in Japan”, how it is perceived in both Japan and
Korea, and what meaning it has. He identified the follow-
ing four points in the flow of events from its beginnings to
the present day. 1) Although the Winter Sonata boom is
worthy of mention, the “Korea Boom” did not spring up
suddenly, but developed gradually through the influence
of events such as the Olympics and the World Cup. 2) On
the other hand, the TV series was indeed epoch-making,
and the “Korea Boom” has made its presence felt within
the Japanese national sentiment at least as an entertain-
ment genre. 3) Having said that, the relationship between
the “Korea Boom” and politics is unclear. We could say
that the “Korea Boom” came about despite the Yasukuni
and Takeshima disputes, or we could say that such issues
have risen despite the existence of the “Korea Boom”. 4)
Although it has formed a basis for exchange on a personal
level, a “Korea Boom”, even in the present day, awakens
an “Anti-Korea Boom” in Japan, and hostility in Korea at
seeing its own people’s servitude towards Japan.

Report by KOHARI Susumu (Professor, Faculty of Interna-
tional Relations, University of Shizuoka)

东亚文化研究会报告

学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2008 年度第 5 次东亚文化研究会
“如何在日韩两国间政治与文化关系
中对‘韩流’进行定位”

报告人：小针 进(静岡県立大学国际关系学部教授)
时 间：2008 年 8 月 1 日(周五) 18 : 30 - 20 : 30
地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 26
层 A 会议室
主持人：王 敏(法政大学国际日本学研究所教授)

小针教授就“日本的‘韩流’现象”在日韩两国间
如何定位、具有何种意义等问题，从“韩流”自发端直
至今天的演变过程中，简明扼要地分析得出了以下 4 点

论述：①虽然“冬季恋歌”热被人们大书特书，但“韩
流”绝不是突然产生的，而是以奥运会、世界杯等事件
为杠杆，逐渐发展成熟的；②另一方面，“冬季恋歌”
热事实上的确是一个划时代的事件。它使得“韩流”在
日本人的国民感情中，至少在影视娱乐领域具有牢不可
撼的地位；③“韩流”与政治的关系十分微妙。一方
面，日韩两国间尽管存在靖国神社和竹岛之争等问题，
但“韩流”依然兴盛。另一方面，尽管“韩流”如此兴
盛，日韩两国间仍会出现各种各样的问题；④虽然“韩
流”对于巩固日韩两国间人员交流的基础的确能够起到
一定的作用。但目前“韩流”也分别在日韩两国引起
了一些问题。例如，在日本，就出现了所谓的“厌韩流”。
同时，在韩国，那些在日本掀起“韩流”的人也往往被
视为日本的隶属者而遭到人们的反感。

【执笔者：小针 进(静岡県立大学国际关系学部教授)】

동아시아 문화 연구회 보고

학술 프론티어 서브프로젝트② 이문화로서의 일본
2008 년도 제5회 동아시아 문화 연구회
「한류를 어떻게 평가할 것인가~한·일
간 정치와 문화의 맥락 안에서」

보고자 고타리 스스무(小針 進) 씨(시즈오카현립
대학(静岡県立大学) 국제 관계학부 교수)
·일시 2008 년 8 월 1 일(금) 18 : 30 ~ 20 : 30
·장소 호세이 대학(法政大学) 이치가야 캠퍼
스 보아소나드 타워 26 층 A 회의실
·사회 왕민(王敏, 호세이 대학 국제 일본학 연
구소 교수)

고타리씨는「일본에 있어서의 한류 현상」이 한·일
양국에서 어떻게 평가되고 있으며, 어떠한 의미를 갖고
있는가에 관해, 한류 현상의 발단에서부터 오늘 날에
이르기까지의 흐름 안에서, 다음과 같은 네 가지 관점
을 명쾌하게 제기했다. ①「겨울 연가」붐이 특필할 만

한 계기가 되긴 했지만, 「한류」는 결코 갑자기 발생한
것이 아니라, 올림픽이나 월드컵 등의 이벤트를 발판으
로 서서히 준비되어 왔다. ② 한류 현상이 획기적이었
던 것은 사실이며, 오늘 날 일본인의 국민 감정 안에
서, 적어도 엔터테인먼트 장르에 있어서, 「한류」는 부
동의 존재감을 획득하기에 이르렀다. ③ 그렇다고는 하
지만 「한류」와 정치와의 관계는 미묘하다. 야스쿠니
신사 참배·타케시타(독도) 문제에도 불구하고 「한류」
가 성립되었는가 하면, 반면에, 「한류」가 있음에도 불
구하고 야스쿠니 신사 참배·타케시타 문제가 발생했
다는 점을 들 수 있다. ④ 「한류」가 한·일간 인적 교류
의 기반 확립에 기여한 것은 사실이나, 아직도 일본에
는 「혐한류」가 존재하며, 한국에서는 일본의 「한류」
에 동조하는 자국민을 일본의 예측자로 보는 등, 양국
모두 「한류」에 대한 반감 또한 공존해 있다는 것은 분
명한 사실이다.

【기사 집필 : 고타리 스스무(小針 進,
시즈오카 현립대학 국제 관계 학부 교수)】

2008 年度第 6 回東アジア文化研究会 「支え合う近代～日中二百年の再検証～」

劉 建輝（国際日本文化研究センター准教授）

- 日 時：2008 年 9 月 18 日（木）18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58 年館 2 階国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）

劉先生は遼寧大卒業後、神戸大大学院博士課程を修了され北京大副教授を経験されて、99 年から国際日本文化研究センターに移られた。今回の研究会では日中比較文学・文化、文化史の視座から持論を報告された。近代の日中関係は侵略と被侵略の対立の目で捉えられてきたが、これは一面的な見方で、影響があった近代化というもう一つの面に光をあてるべきだとする。これは日中双方の近代史の空白を埋めることになるという。以下は概要である。

日本文化の特殊論がはやったりしているが、二本立てに特徴があると見るべきだろう。日本文化には神話的な古層があり大陸文化の影響を受けつつ出来上がった。たとえば「古事記」の記述にある「いざなぎ」「いざなみ」の左回り・右回りにしても大陸の影響とみられる。「国風」文化という言い方があるが、影響されない純粋なものと考えるのは間違っているだろう。文化が形成される過程は複雑だと思う。近代史は逆に日本から中国への一方通行とみなされがちだが、相互に支えあった交流が文化レベルにあった。極めて多面的に日中の文化は刺激しあったのである。

近代西洋文明の導入では中国が先んじた。多くは広州、上海が窓口になり、日本からだ「近代は上海からやってくる」と見られたに違いない。最初は洋書も、日本人は漢訳本で触れるのがふつうだった。西洋情報を得ようと晩清 5 誌（「遐邇貫珍」「中外新報」「六合叢談」「香港新聞」「中外雑誌」）を求めた。19 世紀

30 年代にはイギリス宣教師で中国語に精通したロバート・モリソンの名が日本で知られていたのはそれだけ漢訳に西洋知識を求めていた状況を物語るものである。

明治維新に成功した日本が近代化のため、漢訳に親しんだ成果を生かして西洋思想と科学技術における日本製の漢語を創り出した。欧米語に触れた 19 世紀の中国における英華や華英の字典を活用したに違いない。中国にはたとえば「……性」「……化」「……的」という新しい使い方が伝えられた。梁啓超は率先して近代日本語に触れて習得し著述を通して広めた。近代中国語における西洋関係の漢字は 8 割が日本より借用したと推定される。

西洋の新概念の理解に漢字が適応したことは大きい。文化の相互交流にも結びついた。旧「満州」を舞台に、日本語の総合分科誌「芸文」や「満州浪漫」などが創刊されて、一種の国際性を帯びたことは注目すべき現象であった。

中国では日本帝国主義と結びつけ、日本では遅れた中国文化と卑下して、影響しあった面から目をそむけてきたのではないか。これでは日中ともに近代文化史の実相にせまることはできない。将来の課題である「東アジア文化圏」の再構築に向けて、支え合う日中交流を正確に見ていきたい。タブーを破ることが欠かれない。

【記事執筆：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）】



劉 建輝氏



East Asian Culture Research Meeting:
report

Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an ‘Other’ Culture

6th East Asian Culture Research Meeting of 2008

“Mutually Supporting the Modern Age: Reexamining Two Hundred Years of Japan and China”

Speaker LIU Jianhui (Associate Professor, International Research Center for Japanese Studies)
Date Thursday, 18 September 2008, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

Japanese culture, with its layer of mythical history, developed amidst influence from continental culture. It is often called “indigenous” culture, but it is surely a mistake to assume it is pure and without outside influences. The process of cultural formation is a complicated one. In contrast, modern history tends to view any influences as one way from Japan to China, but, in fact, mutually supported exchange on a cultural level has meant that Japanese and Chinese cultures stimulated each other in very many ways.

东亚文化研究会报告 学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2008 年度第 6 次东亚文化研究会 “相互支撑的近代——对日中两百年的 再考察”

报告人：刘建辉（国际日本文化研究中心讲师）
时间：2008 年 9 月 18 日（周四）18:30 - 20:30
地点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室
主持人：王敏（法政大学国际日本学研究所教授）

日本文化自神话时代的远古以来就不断接受大陆文化的影响，并逐步发展至今。在日本虽然也存在着所谓的“国风”文化这一说法，但如果将其理解为是完全没有受到过外来文化影响的纯粹文化，则会大错特错。文化形成的过程是极其复杂的。人们往往会误认为，在近代史上，是由日本单方面地向中国输出文化。实际上，日中两国的相互支撑和交流不仅仅体现在文化层面上。在许许多多的方面，日中两国的文化都在不断的相互刺激。

实际上，率先引进了近代西方文明的国家是中国。

Regarding the introduction of modern Western civilization, it was China who was first in line. Japan, having succeeded in bringing about the Meiji Restoration in its modernization process, then devised its own Chinese compounds to translate Western thought and scientific technology, having already been familiar with Chinese translations. However, there can be little doubt that it made use of the English-Chinese/Chinese-English dictionaries dating from 19th-century China's contact with Western languages. LIANG Qichao then took the lead in mastering modern Japanese and disseminating it through his work. It is reckoned that 80 percent of the characters used to describe the West in modern Chinese are borrowed from Japanese.

Chinese characters very much suited the understanding of new Western concepts. This even connects with a mutual cultural exchange. Japanese interdisciplinary, special-interest journals set in former Manchuria, *Geibun* and *Manshū Roman* etc. were launched, and the effect of these is notable for assuming a kind of internationality.

China was drawn in by Japanese imperialism, while Japan belittled lagging Chinese culture; but have we not averted our eyes from the aspect of this mutual influence? By ignoring it we cannot close in upon the truth of modern cultural history of either Japan or China. Our aim is to accurately observe mutually supported exchange between Japan and China, as we work towards our future challenge of reconstructing an “East Asian cultural sphere”.

Report by WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

日本在明治维新获得成功之后，为了实现近代化，充分发挥熟悉汉语的优势，学习运用汉语的译著，创造出大量用于表现西方思想和科学技术的日本式汉语。19 世纪的中国，由于已经接触到欧美语言，因而编纂了英汉和汉英词典。毫无疑问，日本充分借用了中国所编纂的这些词典。梁启超率先接触学习到近代日语，并通过其论著而在中国加以推广。人们估计，在近代汉语中，与西方有关的汉字中，80%都是由日本借用而来的。

通过对应的汉字来理解西方的新概念是极其重要的。而这与文化的相互交流也是紧密联系在一起的。在“伪满洲国”，日语的综合分科志《艺文》和《满洲浪漫》等刊物得以创刊发行。而其中所包含着的某种国际性值得引起关注。

长期以来，中国将日本和日本帝国主义联系在一起，日本则对落后的中国文化充满蔑视，双方都背过身去，互不理睬。因此，日中两国都不能再停留在这种近代文化史的交流状态中，而是应该面向未来，共同就重新构筑“东亚文化圈”这一课题，相互交流，相互支撑，以形成一种正确健康的日中交流方式。

【执笔者：王敏（法政大学国际日本学研究所教授）】

동아시아 문화 연구회 보고

학술 프론티어 서브프로젝트② 이문화로서의 일본

2008 년도 제 6 회 동아시아 문화 연구회
「상호 협조적인 근대~일·중 이백 년의 재검토~」

보고자 劉 建輝씨(국제 일본 문화 연구 센터
준교수)

·일시 2008 년 9 월 18 일 (목) 18:30 ~ 20:30

·장소 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스
58 년관 2층 국제 일본학 연구소 세미나실

·사회 왕민 (王敏, 호세이 대학 국제 일본학 연구
소 교수)

일본 문화는 신화적인 옛 것이 대륙 문화의 영향을 받으면서 형성되어 왔다. 한편에서는 「국풍 (国風)」 문화라는 말이 회자되고 있지만, 외국의 영향을 받지 않은 순수한 문화는 있을 수 없다고 생각된다. 문화가 형성되는 과정은 복잡하다. 근대사에 있어서, 문화는 역으로 일본에서 중국으로 일방 통행된 것으로 평가되는 경향이 있다. 그러나 일본과 중국 사이에는 사실상, 서로 주고 받는 상호 문화 교류가 이루어졌으며, 일·중의 문화는 상호간 다방면에 걸쳐서 자극을 주고 받았다.

근대 서양 문명의 도입에 있어서는 중국이 앞섰으나, 메이지 유신 (明治維新) 을 성공시킨 일본은 근대화를 위해, 숙달된 한자 번역 능력을 충분히 활용하여, 서양 사상과 과학 기술에 관한 일본제 한자를 창조해냈다. 당시 일본이, 서구어를 소개한, 19 세기에 중국에서 발행된 영화 (英華), 화영 (華英) 사전을 활용했다는 것은 의심의 여지가 없다. 한편, 梁啓超는 술선해서 근대 일본어를 습득하였으며, 저술을 통해서 일본어를 널리 보급시켰다. 근대 중국어에 있어서 서양 관계 한자의 80%가 일본으로부터 차용된 것으로 추정되고 있다.

한자의 사용은 서양의 신개념 이해에 크게 기여했을 뿐만 아니라, 상호 문화 교류로도 이어졌다. 구 「만주」를 무대로, 일본어 종합 분과지인 「예문 (芸文)」이나 「만주 낭만」 등이 창간되어, 일본어가 일종의 국제성을 띠게 된 것은 주목할 만한 현상이었다.

중국은 일본 제국 주위와 연계시키고, 일본은 뒤떨어진 중국 문화라고 비하하며, 서로 영향을 미쳤다는 사실을 외면해 왔던 것은 아닐까. 이와 같은 태도를 견지하는 한, 일·중 모두 근대 문화사의 실상을 바르게 파악할 수가 없다. 장래의 과제인 「동아시아 문화권」의 재구축을 위해서, 상호 협조 관계에 있는 일·중 교류를 정확히 인식하고자 한다.

【기사 집필: 왕민 (王敏,
호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수)】

學術フロンティア・サブプロジェクト② 異文化としての日本

2008 年度第 7 回東アジア文化研究会

「思想史研究における『知の伝達』とメディア ——江戸思想を素材として——」

辻本 雅史 (京都大学大学院教育学研究科教授)

●日 時: 2008 年 10 月 10 日 (金) 18 時 30 分 ~ 20 時 30 分

●場 所: 法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 25 階 B 会議室

●司 会: 王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

従来思想史研究の方法は、思想家の書いたテキストを読みながら、その考えに忠実に史料として、体系的思想の論理を再構成する方法であった。しかしそれは、思想家を使って自己を再構成しているだけに過ぎない。思想は、江戸時代においては本として印刷出版され、あるいは庶民に向けた語られたのである。思想史を、様々な媒体で外部に向けて出された「言説」として捉え、対話のなかで意味が変わってゆくそのダイナミズムを発見したい。そこで、思想史を「メディア史」として捉え直す方法が必要となる。その二つの方法を提示したい。

第一は、「東アジア思想史」の視点である。儒学思想は日本のものだけではなく、東アジアが共有する思想・知の基底である。その共有テキストをどう読むかが、それぞれの社会の問題に応える知であった。儒学

思想を国単位で考えるのではなく、東アジアの共通性と地域性を明らかにし、時代による変化も考えなくてはならない。そこには、「日本思想 (文化)」に回収しない思想史・文化史の可能性がある。

第二は「知の伝達メディア」という視点である。たとえば現代の「学校」も知のメディアである。江戸時代の知の伝達の現場には、「教育」と「思想伝達」とがあった。前者を「教育のメディア史」として構想し、後者を「思想のメディア史」として構想することができる。知の伝達には、「知の構成」段階、「知の形成」段階、そして「知の伝達」段階がある。江戸時代では漢文が知のメディアであり、漢文でものを考えていた。漢文は当時の国際言語であった。その漢籍の受容には、文字によって受け取る場合と、声で聞き読んで覚える場合とがある。江戸時代は文字使用を組み込



辻本 雅史氏

んだ社会であった。印刷技術と出版社の登場によって文字情報の商品化と大量流通とが起こり、文化の構造的変化が起こった。これは「第一次メディア革命」と言うべきもので、江戸時代はメディア革命の時代だったのである。

しかし一方、江戸時代は「素読」の時代であった。とくに幼少時における教育には、声に出して読み覚える方法がとられた。これは「テキストの身体化」ということができる。素読においては漢文を、返り点・送り仮名で、とっさに日本語読みにする能力が鍛えられた。この能力を身につけることで、中国・朝鮮国など東アジアの人々と筆談で会話することが可能になった。貝原益軒は『慎思録』で、「初学や俗学は知識が皮膚の表面にとどまるだけだが、学問を積んだ者はその知識が皮から肉、骨、髄にまで至っているのである」と、知性を身体にたとえている。まさに素読の身体性の現れである。

江戸時代の学問の中心は、儒学に関する明代の注釈書をもとにした朱子学であった。中国・朝鮮で印刷された版本が舶載され、それによって学んだのである。山崎闇斎は、明代朱子学注釈書を暗記する「口耳記誦の学」を批判し、声によって語るという方法で講釈する方法を確立した。その方法とは、朱子による儒学の再構成を追体験し、そのなかで自分自身が儒学を再構成することだった。闇斎学は、朱子の真義を「体認自得」（自らする身体的な体得）であるとし、テキストの言語の奥に潜む朱子の真義こそを伝達する学として確立される。その過程では方法として「講釈」（口語話法）が用いられた。これは従来の儒学伝統からの逸脱であった。日本朱子学はそのように成立してゆく。

一方、荻生徂徠はそれと反対に、反講釈、読書主義をとる。闇斎学が語りのメディアを用いたのに対し、徂徠学は漢籍文字メディアを用いたのである。それは知の伝達メディアの対立（「声＝耳」と「目」の対立、講釈と読書の対立）であった。徂徠は訓読法を否定し、中国口語を日本の日常口語に瞬時に転換することで、中国古代語を読む「古文辞」の方法をとったのである。古文辞を「看書」（目と心で見る）することに習熟し、古代中国人と同じように読むことをめざしたのだった。ここには、読書の習熟による身体内部化と



いう方法がある。

このような儒学の学び方の多様化の背後には、出版メディアの展開があった。たとえば貝原益軒は、大量で多様な著作を著し、「益軒本」は次々とロングセラーとなる。貝原益軒は、出版するために著作した最初の儒者であった。それまで漢文によって書かれてきた学問書を、日常言語に翻訳したのだった。この背後には、江戸時代の、商業出版メディアの成立、識字民衆の広範な存在、文化的中間層（漢文読者と娯楽読者の中間）の出現、学習意欲もつ民衆の成立があったのである。

学習する民衆の登場が、石門心学の確立につながった。石田梅岩は耳で聞く「耳学問」を重視し、講釈の方法を使った「道話」という語りの技術を開拓したのだった。心学の内容は「開悟」への導きであった。非言語世界を言語で伝達する、という困難なことを口語話法の駆使によって実現したのである。これは口語（声）で構成する「学問」の創出であり、漢文言語への対抗であった。石田梅岩は庶民が諸問題に対応することを可能にする実践的な知をめざしたのである。石門心学は手島堵庵や中沢道二などの後継者を生み出した。「語りのパフォーマンス」としての道話は聴衆に感動体験を誘発し、爆発的に流行する。江戸では無宿人たちを集めた講釈として続いていった。しかし19世紀社会秩序の解体は共同体から排除される底辺民衆を生みだし、やがて道話にも救済不能となった。そこに民衆宗教による救済が現れる。

近代になると、漢文言語が欧米言語に替わった。近代の学校は国家が国民教育をする巨大なメディアであり、近代知の伝達メディアである。一義的な伝達が必要になり、それは文字に定着させる必要があった。文字のメディアこそが近代知を作ってきたのである。世界史の奇跡と言われる日本における学校の急速な普及は、江戸時代の出版文化の基礎があったからであった。しかし現代は、大学の基本を作っている文字メディア（近代知）の崩壊が始まっているのではないか。学校教育中心ではない教育史を、このメディア史の観点から構築したいと思っている。

【記事執筆：田中 優子（法政大学社会学部教授）】

East Asian Culture Research Meeting: report Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

7th East Asian Culture Research Meeting of 2008

“‘Knowledge Transfer’ and Media in Research of the History of Thought: Based on Sources of Edo Thought”

Speaker TSUJIMOTO Masashi (Professor, Kyōto
University Graduate School of Education)
Date Friday, 10 October 2008, 18:30-20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, Bois-
sonade Tower 25F Conference Room B
Chair: WANG Min (Professor, Hosei Universi-
ty Research Center for International
Japanese Studies)

Here we propose two methods for reconsidering the
history of thought as “history of media”. The first is from
the viewpoint of “history of thought in East Asia”. Confu-
cian thought was common knowledge throughout East

Asia. The second is from the viewpoint of “knowledge
transfer media”. Due to the appearance of printing tech-
nology and publishers during the Edo period, scriptural
information was commercialized and circulated in quan-
tity, by which a structural change took place within the
culture. The Edo period was in other words a media revo-
lution. The Edo period saw training in the ability to read
Chinese following Japanese readings. Once this was mas-
tered, it was possible to converse with peoples of East
Asia such as China and Korea. During the Edo period
there was diversification in methods of using narrative
media, scriptural media etc., and also knowledge transfer
media. Through the popularization of narrative media,
the opportunity was realized for ordinary people to en-
gage in study. For this reason, schools spread rapidly in
the modern era. Written media formed the basis during
the modern era, but that is now beginning to crumble. We
need to establish an educational heritage which is not
centred on school education, but which exists from a per-
spective of media history.

Report by TANAKA Yūko (Professor, Hosei University Faculty of
Social Sciences)

东亚文化研究会报告

学术开拓推进项目②作为异文化的日本 2008 年度第 7 次东亚文化研究会 「思想史研究中的『知识的传达』与媒 介——以江户思想为素材」

报告者：辻本雅史（京都大学大学院教育学研究科教授）
时 间：2008 年 10 月 10 日 18:30 - 20:30
会 址：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 25
层 B 会议室
主 持：王敏（法政大学国际日本学研究所教授）

在本文中想提出两种关于将思想史作为“媒介史”
重新理解的方法。第一，“东亚思想史”的视点。因为
儒学思想曾是东亚共有的知识。第二，“传达知识的媒

介”这一视点。在江户时代印刷技术和出版社的出现引
发了文字信息商品化及大量流通，产生了文化的构造性
的变化。江户时代是媒介革命的时代。江户时代也锻炼
了将汉文用日语读出的能力。因为掌握了这样的能力，
使得和中国、朝鲜等东亚的人们通过笔谈进行会话
成为可能。通过运用谈话媒介、文字媒介等方法，知识
的传达媒介在江户时代变得多样化了。谈话媒介的大众
化使得庶民也有了做学问的机会。这是在近代学校得以
急速普及的原因。到了近代，文字媒介成为了基础，也
开始了它的崩坏。因此，有必要以媒介史的观点来重新
构筑非学校教育为中心的教育史。

【记事执笔：田中 优子（法政大学社会学部教授）】

동아시아 문화 연구회 보고

학술 프론티어 서브프로젝트② 이문화로서의 일본 2008 년도 제 7 회 동아시아 문화 연구회 「사상사 연구에 있어서의 『지식 전달』 과 미디어—— 에도 (江戶) 사상을 소 재로 ——」

보고자 쓰지모토 마사시씨 (辻本雅史, 교토 대
학 대학원 교육학 연구과 교수)
일 시 2008 년 10 월 10 일 (금) 18:30 ~ 20:30
장 소 호세이 대학 (法政大学) 보나소아드 타
워 25 층 B 회의실
사 회 왕민 (王敏) 호세이 대학 국제 일본학 연
구소 교수

사상사를 「미디어사」로서 재조명하는 두 가지의
방법을 제시하고자 한다. 그 첫 번째는, 「동아시아
사상사」적 시점이다. 이는, 유학 사상은 동아시아가
공유하는 지식이었기 때문이다. 두 번째는 「지식의

전달 미디어」적 시점이다. 에도 (江戶) 시대에는 인
쇄 기술과 출판사의 등장으로 인해 문자 정보의 상품
화와 대량 유통이 가능해져, 문화면에 있어서 구조적
변화가 일어났다. 에도 시대는 미디어 혁명의 시대였
던 것이다. 에도 시대에는 한문 (漢文) 을 일본어식
으로 읽는 능력 또한 숙련되었다. 이 능력을 습득함으
로 인해, 중국·조선국 등 동아시아 인들과 필담으로
담화하는 것이 가능해졌다. 담화 미디어를 사용하는
방법이나, 문자 미디어를 이용하는 방법 등과 같은,
지식 전달 미디어 또한 에도 시대에 다양화되었다. 담
화 미디어의 대중화에 의해 서민들이 학문할 수 있는
기회도 대두되었다. 이러한 점들이 근대에 들어 학교
가 급속히 보급된 이유이다. 근대에 들어서는 문자 메
디아가 기본이 되지만, 그 붕괴 또한 시작되었다. 학
교 교육 중심이 아닌 교육사를 이러한 미디어사의 관
점에서 구축하고자 한다.

【기사 집필：다나카 유코 (田中 優子,
호세이 대학 사회학부 교수)】

2008 年度第 8 回東アジア文化研究会

「近代日本のアジア侵略

— その歴史背景を大きな歴史の流れの中でとらえなおす —

西原 春夫 (アジア平和貢献センター理事長、
早稲田大学名誉教授・元総長)

- 日 時：2008 年 11 月 11 日 (火) 18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 80 年館 7 階大会議室 1
- 司 会：王 敏 (法政大学国際日本学研究所教授)

80 歳を超えるご高齢の西原春夫先生は、近代史を踏まえて将来の日本が進むべき道筋を明らかにされた。

先生は戦前の皇国教育を受けた結果、戦中は文字通りの愛国少年として祖国日本の正義と勝利を信じていたが、17 歳で迎えた終戦を機にそれまでの確信がすべて潰え去った。爾來、先生は近代日本のアジア侵略の意義や背景を一貫して探求し続け、近年ようやく結論を得た、として本講演が始められた。

以下、配布されたレジュメの章立てに沿ってその内容をかいつまんで紹介する。

I. 前 言

近代日本のアジア侵略の意義や背景については、終戦後数年を経ずして解明し尽くされたとされていたが、この 60 年間に人類は大きな歴史的变化を経験したために、当時確定した認識や評価に新たな視点が提供された。

II. 明治維新当時日本が学んだ先進国の国家観は 19 世紀的国家観であった

「日本が植民地化を免れたのは、先進国並みの国家構造を急いで作り上げたからだ」という歴史認識に誤りはないが、問題は、それ以外にも欧米先進国から受け入れたものがあった。それこそが、日本に開国を迫った当時既に彼らが確立していた「軍国主義に裏打ちされた、植民地主義を内容とする帝国主義」であった。先生はこれを、「日本はきらびやかな議会制民主主義と並び、そのどす黒い帝国主義を当然のものとして受け入れ、実践したのがその後のアジア侵略の歴史

であった」と規定する。

つまり日本は自らが帝国主義国家になることで、侵略と植民地化を辛うじて免れ得たのである。ここで近代帝国主義の特色を、「軍国主義に裏打ちされた、植民地主義を内容とする」と定義したうえで、近代日本の歩みはまさにそうした意味での帝国主義に他ならなかったとする。

III. そのような 19 世紀帝国主義が形成された理由

先生は、歴史を「流れ」として捉えることが必要であるとして、大局的見地から、近世・近代の間にヨーロッパが歩んだ道筋を俯瞰する。

すなわち、長く続いた封建思想を打破するところから啓蒙思想が生まれ、それがフランス革命等を経て市民国家が建設され、やがて産業革命を迎える。この間に発達した資本主義経済が新たに生み出したのが軍国主義であり、国家主義と結合した帝国主義であった。それはいわば、19 世紀の「流行病」であった。

明治維新後の日本もそうした時代の流行病に感染していた。ただし、こうした歴史解釈をもって、日本のアジア侵略における戦争責任を回避することはできない。戦争は加害行為を伴うのであるから、そこには当然加害者と被害者が存在し、しかもこの場合、日本は加害者であり、アジアの民衆は被害者であることは自明のことであり、いかなる論理をもってしてもこれだけは正当化できない。ところが最近の戦争肯定論者はそこを見落としているとして厳しく批判する。

日本が当時どれほどこの流行病に感染していたかを示す歴史的証拠として、明治 9 年に安政の日米修好通商条約と全く同じ内容の、すなわち相手国に裁判権



西原 春夫氏



を認めないいわゆる治外法権などを内容とする条約を日朝間において締結したことを挙げる。日本はアメリカ帝国主義のコピーの如く振る舞ったことの例証である。

Ⅳ. 流行病は終熄したか？ 終熄したとすればいつか？

暫定的には第一次世界大戦後、先進国間では既に終焉を迎えつつあった。その論拠は、①国際連盟の成立、②クーデンホーフ・カレルギーの「ヨーロッパはひとつ」の主張、③1928年の不戦条約の提案（これには日本を含む63カ国が加盟）である。

いったんは軍国主義に裏打ちされた植民地主義を内容とする帝国主義は終焉を迎えたかに見えたが、引き続いて第二次世界大戦が起った。日・独・伊（いずれも古い歴史を持つ国家であり、民族であることに注意）は植民地競争に後れをとった後発資本主義国家であったために、これら三国が新たな帝国主義国家として世界に乗り出してきたことが直接の原因であった。だが1945年に3国が敗戦を迎えた時、確定的に終熄を見た。その論拠は、①国連憲章における国際紛争を武力で解決しないという宣言、②植民地の独立（現在ではもはやかつてのような植民地は地球上から姿を消した）、③以後先進国同士の全面戦争がなくなったこと、である。

V. 結 語

近代日本のアジア侵略の意義と背景を、以上のような歴史の流れの中に置いて考えたとき、日本あるいは世界の国々が、21世紀に帝国主義国家・軍国主義国家に再び変質する可能性はないと結論づける。

それどころか、世界はますますグローバル化の度合いを早め、かつ深めているために、近代史においては侵略のためにあった軍事力も防衛のための軍事力へ、さらに現在ではテロや宗教紛争・民族紛争の抑止のための警察力として機能するようになるなど、軍事の意義・役割も大きく変質してきている。

また「ひと・かね・もの・情報・技術」は国境を軽々と越え複雑に入り組んで行き来しているために、各国の利害が複雑に絡み合っており、もはや一国主義や鎖国政策を取ることを不可能である。

ヨーロッパ諸国がEUを構成して共同体としての結びつきを強めているように、東北アジア諸国も歴史認識を共有しつつ同様な共同体をやがて形成するであろうことは、可能性の有無、必要性の有無の議論を超えて必然の趨勢であり、必ずや「そうになってしまう」に違いない。

私事で恐縮だが、先生の刑法総論を受講して以来、実に40年ぶりに拝聴する講演であったことを書き添えておきたい。

【記事執筆：谷中 信一（日本女子大学教授）】

East Asian Culture Research Meeting: report

Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

8th East Asian Culture Research Meeting of 2008

“Modern Japan’s invasion of Asia: Re-understanding its Historical Background within the Greater historical Flow”

Speaker NISHIHARA Haruo (Governor, Asian Peace Making Center; Professor Emeritus and former Chancellor, Waseda University)

Date Tuesday, 11 November 2008, 18:30 – 20:30

Venue Hosei University Ichigaya Campus, '80 Building 7F, Large Conference Room 1

Chair: WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The significance and background of modern Japan’s invasion of Asia was supposedly fully illuminated soon after the end of the war. However, throughout the 60 years since, human history has put forward new viewpoints regarding its perception and evaluation. That is to say: modern Japan accepted, without question, the “dark imperialism manifesting in colonialism and shadowed by militarism” along with the parliamentary democracy upheld by the developed countries of Europe and America. This was precisely the epidemic of the 19th century. In other words, Japanese imperialism was a result of briefly catching the infection, and not the true nature of the nation of Japan; it has been cured of the epidemic during the 60 postwar years, and there is no fear of re-infection.

The epidemic of the previous century came to an end not only in Japan, but the world over. This century we have entered a new history of globalization. Due to this, 20th century-style world-scale wars among developed nations will become impossible. Instead, “people, money, goods, information, technology” will move in all directions, and as a result the world may start to function as one community.

Report by YANAKA Shin’ichi (Professor, Japan Women’s University)

东亚文化研究会报告
学术开拓推进项目②作为异文化的日本
2008 年度第 8 次东亚文化研究会
「近代日本の亚洲侵略 —— 其历史背景
在大历史潮流中的重新理解」

报告人：西原 春夫 先生（亚洲和平贡献中心理
事长、早稻田大学名誉教授・原总长）

时 间：2008 年 11 月 11 日 18：30 - 20：30

会 址：法政大学市谷校区 80 年馆 7 层大会议室 1

主 持：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）

关于近代日本の亚洲侵略的意义和背景，战争刚刚
结束没多久就已经被阐明，但是之后的 60 多年间人类
史对这一认识和评价提供了新的观点。即和议会制民主

主义一样，近代日本将欧美先进国保有的“被军国主义
支持，以殖民地主义为内容的黑暗帝国主义”也作为当
然的事物接收了，这正是 19 世纪的流行病。日本の帝
国主义正是感染了流行病的结果，那并不是日本固有的
真实面貌，而且战后 60 年间日本已从这个流行病中恢
复，不会再被感染。

不仅是日本，上世纪中的这种流行病在全世界已经
结束，本世纪进入到了全球化这样一个崭新的历史阶段。
因此，不可能再有 20 世纪那样的先进国之间的世界规
模的战争，不如说“人・金钱・事物・信息・技术”使
世界纵横交错，其结果是世界将会朝着一个共同体方向
发展。

【记事执笔：谷中信一（日本女子大学教授）】

동아시아 문화 연구회 보고
학술 프론티어 서브프로젝트② 이문화로서의
일본

2008 년도 제 8 회 동아시아 연구회
「근대 일본의 아시아 침략 —— 그 역사
적 배경을 총체적인 근대사의 흐름 안
에서 재조명하다 ——」

- ・보고자 니시하라 하루오씨（西原春夫、아시아
평화공헌센터 이사장, 와세다대학
명예교수・전 총장）
- ・일 시 2008 년 11 월 11 일（화）18:30 ~ 20:30
- ・장 소 호세이 대학（法政大学）이치가야
캠퍼스 80 년관 7 층 대회의실 1
- ・사 회 왕민（王 敏, 호세이 대학 국제일본학
연구소 교수）

근대 일본의 아시아 침략에 대한 의의와 배경에
관해서는, 제 2 차 세계 대전 직후 완전히 해명된
것으로 여겨졌으나, 그 후 60 여년간에 걸친 인류사는

기존의 인식과 평가에 새로운 시점을 제공했다. 즉,
근대 일본은 의회제 민주주의의 수용과 더불어,
서미（欧米）선진국이 견지하고 있던「군국주의를
등에 업고 자행된 식민주의를 골자로하는 검은
제국주의」또한 당연한 것으로 받아들였으나, 이야말로
19 세기에 만연했던 유행병이었다. 다시 말해서,
일본의 제국주의는 일본의 국가 체질이 아니었으며,
그것은 단지 일시적인 유행병에 감염된 결과에
불과했다. 더욱이 전후 60 년 동안 이 유행병에서
회복되었으며 재감염될 우려는 없다.

일본 뿐만 아니라, 이전 세기에 만연했던
이러한 유행병은 전세계적으로 종식되었으며,
금세기는 글로벌화라고 하는 새로운 역사적
단계에 진입했다. 따라서 20 세기적인 선진국간에
있어서, 세계적 규모의 전쟁은 불가능하며, 오히려
「인간・금융・물건・정보・기술」등이 세계의 장벽을
넘어서 자유롭게 이동할 것이며, 그 결과 세계는
하나의 공동체로서 기능하게 될 것이다.(2008.11.25)

【기사 집필：야나카 신이치

（谷中信一, 일본 여자 대학 교수）】

2008 年度第 9 回東アジア文化研究会

「社会主義という資本主義的社会と 資本主義という社会主義的社会 — 中国文化と日本文化 —」

代田 智明（東京大学大学院総合文化研究科教授）

- 日 時：2008 年 12 月 3 日（水）18 時 30 分～20 時 30 分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナード・タワー 26 階 A 会議室
- 司 会：王 敏（法政大学国際日本学研究所教授）
安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長）

中国と日本の現代政治経済を理解する上で、現在の体制や近代化の過程を理解するとともに、近世社会の基礎的文化を顧みる必要があるのではなかろうか。たとえば、中国は宋代以降、均分相続制のもと、世襲官僚制はなくなり、誰にでも自由に参加できる科举による自由競争の社会が確立していった。これに対し、日本では、室町時代から田地の不足のため長子相続制が確立し、家の継続性を守る志向が強くなった。このため中国では、宗族とよばれる血縁共同体は、一方で相互依存と協働の機能をもちつつ、内外に競合意識を強めることとなる。同世代の親族は、仲間であるとともにライバルであり、宗族内部の下位分類である「房」や「系」も、かつまた宗族同士も、地域の中で競い合う存在であった。富は三代続かない、といった言い方が中国でなされるのは、このためであると言ってよい。また多様な文化習俗と言語をもった広範な地域が、近世という世界的に分割へ向かう時代に、ひとつの王朝体制を継続し得たのも、科举制度による中央への上昇志向が紐帯となって、結びつけていたと理解すると分かりやすい。

同時に、宋代から王朝体制は大きく変化し、科举を勝ち抜いた知識人つまり士大夫層の発言権が強くなった。一方、地域農村社会の発展により、農村は閉鎖的自給社会から、「半農半商」的社会へと移行し、商業的ネットワークが拡大していった。膨大な統治領域を擁する中央政府は、官僚の派遣による直接支配を行う余裕がなく、租税の徴収を担保する形で地方による自治に任せていくこととなった。実際、清朝後半においては 8 の経済圏のもとに集約されて、地域の末端に枝葉のように広がっていたという見解が有力である。

これに呼応する形で、従来の儒教も「宗教改革」がなされた。朱子学の「理」と「気」の体系は、あらゆる人間が修行によって「気」を抑制し「聖人」になる可能性を示唆し、さらに明末以降、その「気」の要素である欲望についても、生存権にもとづく承認がなされていく。清代以降は、儒教は「礼教」として民間に普及し、科举への基礎的教養を培うと共に、田土流失による混乱に陥りやすい地方秩序の「安全弁」としての機能を果たすこととなった。これに伴い、王朝体制の基幹をなしてきた「郡県制」（中央集権）に対して、「封建制」（地方分権）を主張する人々が現れ、この趨勢は太平天国の乱を収拾する形で生まれた、湘軍・淮軍につながり、地方の「郷紳」と呼ばれる階層の力量拡大をもたらした。省単位の結合が可能になっていた状況の中、鉄道国有化に反対する地元有力者の抵抗により、中央からの省の独立という形で、王朝体制は瓦解していく。その後この流れは、19 世紀後半から強まっていった、西欧的近代化の圧力に対抗する形で、毛沢東なども参加した「連省自治」運動つまり分権的連邦制への志向に繋がっていくのだが、各階層の利害が対立して成功できず、孫文のもとで中央集権化を目指すこととなった。こうして中華民国による「統一」と日本の侵略によるナショナリズムの高揚を経て、人民共和国が建国され、近代国民国家が成立した。しかし、分権化かつ民間空間の拡大という、近世以来の中国的趨勢が消えたわけではなく、建国当初は 5 つの地域の分割統治が行われたし、その後集権化が図られた時期もあったが、文革の際は権限の地方への移譲がなされたため、その後の「改革開放」政策を後押しする結果ともなった。中国経済の「市場主義化」が本格



代田 智明氏



化したのは、1992年の「南巡講話」以降だが、このころ世界的に「新自由主義的」なグローバル化が始まっており、近世中国以来の分権化された競合的上昇志向と、自由競争こそ社会の発展に寄与するというグローバル・イデオロギーとが、親和的に相互作用を起こし、中国経済に刺激を与え、急速な発展をみたことは理解しやすいであろう。ただしこれによって生じている、大規模な格差社会の現状については、重要な課題として今後、検討がされるべきである。

一方日本については、近世とくに江戸時代以降は、分権的幕藩体制と士農工商の身分制度であったところ、その内部における社会システムに「分」に安んずる調和的均一性が生まれ、これは明治維新後、近代国家形成に際しては、国家規模の均一性の強化へと結びついていった。中国が、集権に対抗して分権への傾向を強めていったのに対し、日本は集権への傾向を強めたのである。軍事的総動員体制の瓦解にともない、戦後はその均一的な文化傾向は、企業管理のなかに組み込ま

れ、日本的なコーポレートガバナンスを生み出す結果となり、1960年代の高度経済成長の原動力ともなった。要するに、株主中心ではなく従業員中心であり、年功序列による終身雇用制度、企業間利益の相互分配というシステムである。これをひとことと言えば実際の看板とは異なり、中国は競合性と上昇志向が埋め込まれた「資本主義的社会」と言えるし、日本は格差や差異を避ける「社会主義的社会」ということも言えるのではないか。日本が自由主義的グローバル化のなかで、むしろ立ち遅れたのは、こうした背景が推測されよう。21世紀に入って中国も「安定社会」を目指して、方向性を修正しつつあるが、金融危機を迎え、世界じゅうで経済社会体制の再考が求められている現在、それぞれの近代化を生み出した文化を基礎として検討する視点も重要であろう。

【記事執筆：代田 智明

(東京大学大学院総合文化研究科教授)】

East Asian Culture Research Meeting: report

Academic Frontier Sub-project 2: Japan as an 'Other' Culture

9th East Asian Culture Research Meeting of 2008

“A Capitalist Society called Socialism, and a Socialist Society called Capitalism: Chinese Culture and Japanese Culture”

Speaker SHIROTA Tomoharu (Professor, University of Tōkyō Graduate School of Cultural Studies)
Date Wednesday, 3 December 2008, 18:30 – 20:30
Venue Hosei University Ichigaya Campus, Boissonade Tower 26F Conference Room A
Chair WANG Min (Professor, Hosei University Research Center for International Japanese Studies); ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

In general, Japan is referred to outwardly as a capitalist society, while China, as a socialist society; however, sociocultural observations since the pre-modern period reveal a different angle. Chinese society, which, from the pre-modern era, adopted a liberal bureaucratic selection

system by equal share succession and examination, gave birth to a society with a strong competitive consciousness towards betterment, in which anyone could rise in the world. Also, in order to control such a vast region, people sought decentralized rule along with the development of regional economies, and even now the tendency is strongly towards local governance. In contrast, in Japan, family succession was standard practice from the pre-modern era, and as the status system had stability, a society was born which suppressed fierce competitiveness and achieved uniformity within each status. In the midst of modernization, although China was late in its formation of a nation state due to these decentralized elements, the global trend towards a new liberal system, evolving from the end of the 20th century, bonded with the people's desire for betterment and facilitated rapid economic development. Japan's sociocultural uniformity and harmony immediately contributed to the formation of a centralized nation state, and prewar national allegiance converted into postwar corporate loyalty, thus facilitating high-level economic success. However, Japanese-style business did not lend itself to new liberalist tendencies; rather it was late to revolutionize. Also, in relation to the handling of the recent economic crisis, it proves significant to add to each respective sociocultural picture what we have called the Chinese “capitalist elements” and Japanese “socialist elements”.

Report by SHIROTA Tomoharu (Professor, University of Tōkyō Graduate School of Cultural Studies)

东亚文化研究会报告

学术研究课题②作为异文化的日本

2008 年度第 9 次东亚文化研究会

“号称‘社会主义’的资本主义社会与号称‘资本主义’的社会主义社会 —— 中国文化与日本文化”

报告人：代田 智明（东京大学大学院综合文化研究科教授）

时 间：2008 年 12 月 3 日（周三）18：30 - 20：30

地 点：法政大学市ヶ谷校区布瓦索纳德大楼 26 层 A 会议室

主持人：王 敏（法政大学国际日本学研究所教授）
安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长）

一般而言，人们从表面上都将日本视作资本主义社会，而将中国视作社会主义社会。但如果从近代以来的社会文化层面来加以考察的话，就能发现不同的侧面。

近代以来，中国社会主要实行的是基于均分继承制和科举制度的自由的官僚选拔制，由于任何人都有出头地的可能，因而形成了竞争性上进意识极为强烈的社会。此外，从对庞大的地区实施管理方面来看，伴随着地区经济的发展，人们会要求一种分权式的统治，因此即使是在当前，地方自治的倾向依然很强烈。与此相对，日本在近代以来一直是以长子继承制为规范，由于身份制度十分稳定，因此抑制了激烈的竞争性，从而形成了一个各守本分的均一性社会。在近代化的过程中，中国由于受到分权性要素的影响，迟迟未能形成国民国家。但是，自 20 世纪末开始不断发展的世界性新自由主义制度与中国人的上进心相结合，促成了经济的高速增长。而日本这种均一旦协调的社会文化，则是为日本迅速形成集权性国民国家发挥了重要作用。日本人将战前的国家忠诚转变为战后对企业的忠诚，实现了经济的高度成长。但是，日本式经营与新自由主义倾向背道而驰，反而落后于时代的变革。就连在当前应对金融危机的过程中，我们可以也将日中两国的应对方式分别称作中国式的“资本主义性要素”和日本式的“社会主义性要素”。可见，将彼此的社会文化都纳入视野来加以考察是何其重要之事。

【执笔者：代田 智明（东京大学大学院综合文化研究科教授）】

동아시아 문화 연구회 보고

학술 프론티어 서브프로젝트② 이문화로서의 일본

2008년도 제9회 동아시아 문화 연구회

「사회주의라는 자본주의적 사회와 자본주의라는 사회주의적 사회 —— 중국 문화와 일본 문화」

•보고자 시로타 토모하루씨（代田 智明， 도쿄 대학 대학원 종합 문화 연구과 교수）

•일 시 2008년 12월 3일（수）18:30 ~ 20:30

•장 소 호세이 대학（法政大学）이치가야 캠퍼스 보아소나드 타워 26층 A회의실

•사 회 왕민（王敏， 호세이 대학 국제 일본학 연구소 교수）
아비코 신（安孫子 信， 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장）

일반적으로 표면상, 일본은 자본주의 사회, 중국은 사회주의 사회라고 일컬어지고 있으나, 근세 이래의 사회·문화를 고찰해 보면 색다른 측면을 발견할 수 있다. 근세 이후, 균분 상속제와 과거 제도에

의한 자유로운 관료 선발 제도를 갖추었던 중국 사회는, 누구나 출세가 가능한, 경합적 상승 의식이 강한 사회를 만들어 냈다. 또한 그 방대한 지역을 관리하는데 있어서는, 지역 경제의 발전과 함께 국민들이 분권적 통치를 원했던 관계로, 현재에도, 지방 자치의 경향이 강하다. 이에 비해, 일본 사회는 근세 이래 장자 상속이 규범화 되고, 신분 제도가 안정되어 있었기 때문에, 과격한 경합성이 억제된, 각각의 신분에 부합하는 균일적인 사회를 탄생시켰다. 근대화 과정에 있어서, 중국은 분권적 요소에 의해 국민 국가 형성이 되지긴 했지만, 20세기 말부터 진전된 신자유주의적 제도의 흐름이 국민들의 상승 지향과 결부되어, 급속한 경제 발전을 이룩해 내고 있다. 일본의 경우에는 균일적이고 조화적인 사회 문화가, 조속한 집권적 국민 국가 형성에 공헌하였으며, 전전(戰前)의 국가에 대한 충성이 전후(戰後)에는 기업에 대한 충성으로 전환하여 고도 경제 성장을 이룩하였으나, 일본식 경영은 신자유주의적 경향과는 서로 맞지 않아, 오히려 변혁에 되쳐지게 되었다. 작금과 같은 금융 위기에 대처하기 위해서는, 중국의 「자본주의적 요소」와 일본의 「사회주의적 요소」와 같은, 각각의 사회·문화를 시야에 넣는 것이 중요할 것이다.

【기사 집필：시로타 토모하루

（代田 智明， 도쿄 대학 대학원 종합 문화 연구과 교수）】

天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第2回勉強会 「『王権』研究の現状」

荒木 敏夫（専修大学文学部人文学科教授）

- 日 時：2008年7月12日（土）14時00分～16時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長）

2008年7月12日（土）、14時から16時過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス58年館2階国際日本学研究所セミナー室において、「天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第2回勉強会」が開かれた。今回は専修大学文学部人文学科教授荒木敏夫氏から、古代の天皇・天皇制について、「『王権』研究の現状」というテーマでレクチャーをしていただいた。前回に引き続きやはり内輪の会ということもあって10名ほどの参加者であったが、出発点での日本の天皇制の諸特徴と、その後も通じて天皇制ということで真に問われるべきことについて、荒木氏から、行き届いた説明をしていただいた。

すなわち、「王権」という言葉に留まり、天皇制をあくまでも「日本型王権」として把握しようとする中で、天皇制の内、普遍的な王権論に包摂されていく部分と、そこからはみ出ていく特殊なものとのがより明確に腑分けされていくはずである。地理的にまた歴史的に多様に存在する諸々の王権との比較によって、天皇制のより相対的な観点からの把握を進める必要がある。

日本の天皇制についてはその神秘さ、特異さを安易に持ち出す不可知論的立場がいまだに根強い。天皇制

の‘一貫性’、‘<自然>さ’、‘不執政性’を言う主張がいまだに多くの議論を呪縛している。天皇制では近代と前近代とは峻別すべきものであろう。また、天皇制における‘<作為>’はあくまでも‘<作為>’と見なすべきであろう。また、天皇はまずはやはりれっきとした政治権力の所持者とすべきであろう。

例えば、古代律令制下の天皇は「天皇大権」という形で独自の政治権力を有していた。また貴族達の「合議」というのも、あくまでも天皇の「専制」支配下のものではあった。問題はこのような政治権力がどう形成され、またどんな構造を有していたのかなのである。そこに日本独特なものがあったのかなかったのか。少なくとも、構造については、「譲位」が導入されて、上皇一天皇といった仕方で支配が多極化していったことはきわめて日本的なことと見なされ得るのである。

以上、今回の勉強会では、主に古代の天皇・天皇制の検討を通じて、日本の天皇・天皇制の根幹を再認識することができた。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）】



荒木 敏夫氏



Alsace Symposium Study Meeting

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

2nd Study Meeting in Preparation for the Alsace Symposium on the Emperor and Emperor System:

"The Present State of Research into 'Sovereignty'"

Speaker ARAKI Toshio (Professor of Humanities, Faculty of Letters, Senshū University)
 Date Saturday, 12 July 2008, 14:00 – 16:00
 Venue Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room
 Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The second study meeting in preparation for the Alsace Symposium on the Emperor and Emperor System was held on Saturday, 12 July 2008, from 14:00 to past 16:00 in the Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F Research Center for International Japanese Studies Seminar Room. On this occasion we heard a lecture on the ancient-period Emperor and Emperor System entitled "The present state of research into 'Sovereignty'" by ARAKI Toshio, Professor of Humanities in the Faculty of Letters at Senshū University.

As last time, this was a small-circle meeting of around 10 participants. However, beginning by explaining the various distinctive features of the Japanese Emperor System, Professor Araki went on to provide us with a well-rounded explanation of what the Emperor System is truly accountable for.

Caught up in the term "sovereignty", the Emperor System has always been understood as "Japanese-style sovereignty". This should however help distinguish, all the more clearly, the part of the Emperor System that has been subsumed under the universal theory of sovereignty, from the special features that do not fit the mould. A comparison of many sovereignties, varying in existence geographically and historically, necessitates greater willingness to take a more comparative view of the Emperor System.

The Japanese Emperor System's agnostic stance, which easily conjures mysticism and singularity, is still strong. Claims of the Emperor System's "unity", "spontaneity", "non-administration" still cast a spell over most debates. We must make a distinction between the Emperor System in modern and pre-modern times. We should also regard artificiality in the Emperor System as nothing more than that. Yet we should not forget that the Emperor is the rightful possessor of political power.

For example, under the ancient Ritsuryō System the Emperor held independent political power as an imperial sovereign right. Although aristocratic leaders held council, it was governed by imperial dictatorship. Issues lie in how this political power was formed, and what kind of structure it took. Was it or was it not peculiar to Japan? At least as far as structure is concerned, by introducing "abdication" into the system, multipolarization of governance was achieved through a Retired Emperor-Emperor framework, which appears to be a particularly Japanese phenomenon.

The research meeting thus investigated chiefly the ancient-period Emperor and Emperor System, and facilitated reconsideration of the essence of the Japanese Emperor and Emperor System.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于“阿尔萨斯研讨会”的学习会
 学术开拓推进项目① 构筑以异文化研究为视点的国际日本学

关于“天皇・天皇制——阿尔萨斯研讨会”的第2次学习会
 “‘王权’研究的现状”

报告人：荒木 敏夫（专修大学文学部人文学科教授）

时 间：2008年7月12日（周六）14：00 – 16：00

地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室

主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长）

2008年7月12日（周六）下午14：00至16：00，法政大学国际日本学研究所位于法政大学市ヶ谷校区58年馆2层的国际日本学研究所研究室召开了关于“天皇・天皇制——阿尔萨斯研讨会”的第2次学习会。在本次学习会上，专修大学文学部人文学科教授荒木敏夫就古代日本的天皇・天皇制进行了题为“‘王权’研究的现状”的主旨演讲。

本次学习会与上次相同，依然采取内部会议的形式。会上，荒木敏夫教授以日本天皇制的特征为出发点，并就围绕着天皇制所应探讨的问题，向与会的10名代表进行了详尽的介绍和说明。

荒木敏夫教授认为，在对天皇制的研究中，我们应该始终紧扣“王权”这一关键词，将天皇制作为“日本式王权”来加以把握和分析。这就需要将天皇制框架内所包含的具有普遍性的王权论和独具特殊性的部分明确区分开来，并将天皇制与在不同地域范围、不同历史阶段内所存在的各种王权进行对比，从而更加全面客观地来审视和理解天皇制。

目前, 轻易地将日本天皇制及其神秘感和特殊性归结于不可知论的论调仍然根深蒂固。片面强调天皇制的“一贯性”、“自然而然”和“不执政性”的观点也依旧如魔咒般束缚着人们的思想。实际上, 我们应该将近代和近代以前的天皇制严格区分开来, 我们也应该重新去认识天皇制中“作为”的一面。此外, 我们还应该看到天皇才是正统的政治权力的所有者。

例如, 古代律令制下的天皇就以“天皇大权”的形式享有独自的政治权力。虽然贵族们拥有所谓的“合议”制度, 但也是始终处于天皇的“专制”支配之下。这种政治权力是如何形成的, 其中包含了何种权力构造, 又

是否为日本所独有, 这些问题都值得深入研究和探讨。仅就权力构造而言, 通过引入“让位”机制而形成的“上皇 天皇”这种多极化的支配方式, 就是一种极具日本特色的权力构造形式。

综上所述, 通过本次学习会, 我们主要对古代天皇・天皇制进行了探讨, 并由此对日本天皇・天皇制的本质产生了新的认识。

【执笔者: 安孙子 信

(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)】

알자스 심포지움 학습회

학술 프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구
로서의 「국제 일본학」 구축

천황・천황제 알자스 심포지움을 위한 제 2 회 학습회

「『왕권』 연구의 현황」

- ・ 보고자 아라키 도시오씨 (荒木敏夫) 센슈대학 (専修大学) 문학부 인문학과 교수
- ・ 일 시 2008 년 7 월 12 일 (토) 14:00 ~ 16:00
- ・ 장 소 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 캠퍼스 58년관 2층 국제 일본학 연구소 세미나실
- ・ 사 회 아비코 신 (安孫子 信, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장)

2008 년 7 월 12 일 (토), 14 시부터 16 시 지나서까지, 호세이 대학 이치가야 캠퍼스 58 년관 2 층 회의실에서, 「천황・천황제 알자스 심 포지움을 위한 제 2 회 학습회」가 열렸다. 이번에는 센슈대학 문학부 인문 학과 교수인 아라키 도시오씨로부터 고대의 천황・천황제에 관해, 「『왕권』 연구의 현황」이라는 주제로 강의가 있었다.

전 회와 마찬가지로, 본 학습회는 내부적인 회합인 관계로 약 10 명 정도가 참가하였는데, 일본의 천황제가 시작된 시점에 있어서의 제 특징과, 그 이후의 시점에 있어서도, 일반적으로 천황제라는 사실 때문에 진술하게 제기되어야 할 문제들에 관해서 아라키씨로부터 자세한 설명을 들었다.

즉, 「왕권」이라는 말에 중심을 두고, 천황제를

어디까지나 「일본형 왕권」으로 파악함으로써, 천황제 내에서, 보편적인 왕권론에 포섭되어 가는 부분과, 왕권론에서 밀려나온 특수한 사항을 보다 명확하게 해부할 수 있을 것이다. 지리적으로 또한 역사적으로 다양하게 존재하는 여러 왕권들과의 비교를 통해서 천황제를 보다 상대적인 관점에서 파악할 필요가 있다.

일본의 천황제에 관해서는 안이하게 그 신비로움과 특이함을 호소하는 불가지론적 입장이 아직도 뿌리가 깊다. 천황제의 ‘일관성’, ‘<자연스러움>’, ‘<불집정성 (不執政性)>’ 을 고집하는 주장이 아직도 많은 논의를 차단하고 있다. 하지만, 천황제에 있어서는 근대와 전근대를 산별해야 한다. 또한, 천황제에 있어서의 <작위 (作為)> 는 어디까지나 <작위>로 판단해야 할 것이다. 아울러, 천황은 우선은 위풍당당한 정치 권력의 소유자로 간주해야 한다.

예를 들면, 고대 율령제하의 천황은 「천 황 대권」이라는 형태로, 독자적인 정치 권력을 가지고 있었다. 또한 귀족들의 「합의」라는 것도, 어디까지나 천황의 「전제 (專制)」 지배하에 존재했던 것이다. 문제는 이러한 정치 권력이 어떻게 형성되고, 어떠한 구조를 가지고 있었느냐이다. 그것에 일본 특유의 독특한 뭔가가 있었는지 아닌지가 문제인 것이다. 최소한 구조에 관해서 생각해 볼 때, 「양위」가 도입되어 상황－천 황 이라는 방식으로 지배가 다극화되어 갔던 것은 지극히 일본적인 것으로 볼 수 있다.

이상, 이번 학습회에서는, 주로 고대의 천황・천 황 제에 대한 검토를 통해서, 일본의 천황・천 황 제의 근간을 재확인할 수 있었다.

【기사 집필: 아비코 신 (安孫子 信,

호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第3回勉強会 「二つの『密教』と二つの『顕教』——日本憲政史の中の天皇」

坂野 潤治（東京大学名誉教授）

- 日 時：2008年9月27日（土）14時00分～16時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 80年館7階会議室
- 司 会：安孫子 信（法政大学国際日本学研究所所長）

2008年9月27日（土）、14時から16時過ぎまで、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階会議室において、「天皇・天皇制アルザスシンポジウムにむけての第3回勉強会」が開かれた。今回は東京大学名誉教授坂野潤治先生から、近代の天皇・天皇制について、「二つの『密教』と二つの『顕教』——日本憲政史の中の天皇」というテーマでレクチャーをしていただいた。

前二回に引続き内輪の会ということもあって10名ほどの参加者であったが、明治維新から大正・昭和初期に至る歴史の流れの中で、戦前天皇制がどう成立していったかを、ご自身の近著『日本憲政史』（東京大学出版会）にも拠りつつ、憲政の成立と展開の観点から、きわめて明快に説明していただいた。

すなわち、明治維新に始まる近代日本の政治体制の確立過程は、「一君万民」といった言葉に見られる、社会上下からの二つの運動——「一君」と「万民」——を協働させる道の模索から始まった。幕末の「公議論」や「五箇条のご誓文」などにも見られるように、天皇を「一君」として頂くことと、議会開設を通じて「万民」に政治を開くこととは、車の両輪として相伴うものとして認められていたのである。

しかし実際には「一君万民」は「一君」の強調（保守派）と「万民」の強調（リベラル派）とに引き裂か

れていく。明治憲法の制定過程がまさにその綱引きの場であったが、明治憲法の内部でも、両派はさらに激しいせめぎ合いを続けていく。明治憲法の解釈での、穂積八束の天皇主義と、美濃部達吉の天皇機関説との対立がそれである。それは社会エリート間のものであり、両者がともに「密教」的状態で行っていたせめぎ合いと言い得よう。

やがて両者がともに一般国民を巻き込み「顕教」化していくに連れて、そのせめぎ合いもより社会的なものへと転じていく。大正デモクラシーを通じてまず「顕教」化したのは、「万民」派の側であった。その一定の成果である男子普通選挙法の成立はしかし逆バネ効果を生み、「一君」派の側の「顕教」化も促していく。例えば統帥権問題が政争の具とされ、大政党の右傾化も進むのである。こうして日本社会の左右の揺れ動きは振幅を増し、やがてはその全体が「一君」の側に大きく収束していくことになる。

以上、今回の勉強会では、天皇制が、近代日本においては、その文化的意味云々以前に、まさに政治そのものであったことを、改めてご教示いただいたのである。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）】



坂野 潤治氏



Alsace Symposium Study Meeting

Academic Frontier Sub-project 1: Developing 'International Japanese Studies' as Research on an 'Other' Culture

3rd Study Meeting in Preparation for the Alsace Symposium on the Emperor and Emperor System:

“Two ‘Esoteric Teachings’ and two ‘Exoteric Teachings’: the Emperor within Japanese Constitutional History”

Speaker BANNO Junji (Professor Emeritus, University of Tōkyō)
Date Saturday, 27 September 2008, 14:00 – 16:00
Place Hosei University Ichigaya Campus, '80 Building 7F Conference Room
Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

The third study meeting in preparation for the Alsace Symposium on the Emperor and Emperor System was held on Saturday, 27 September 2008, from 14:00 to past 16:00 in the Hosei University Ichigaya Campus, '80 Building 7F Conference Room. On this occasion we heard a lecture on the modern-period Emperor and Emperor System entitled “Two ‘Esoteric Teachings’ and two ‘Exoteric Teachings’: the Emperor within Japanese Constitutional History” by BANNO Junji, Professor Emeritus of the University of Tōkyō.

As on the last two occasions, this was a small-circle meeting of around 10 participants. However, Professor BANNO provided us with an extremely clear explanation of how the pre-war Emperor System was shaped within the flow of history from the Meiji Restoration through Taishō to the early Shōwa period. He did this from the viewpoint of the establishment of constitutional government and its development, referring along the way to his *A History of Japanese Constitutional Government* (University of Tokyo Press).

The process of establishment of the modern Japa-

nese political system, beginning in Meiji, found its means through the coordination, within social ranks high and low, of two movements: “One ruler” and “Ten thousand people”, as represented in the slogan “One ruler over ten thousand people”. Setting up the Emperor as “One ruler”, and opening politics to “Ten thousand people” through the establishment of assemblies, these were recognized as the two wheels needed to accompany each other, as we already see in the “public debates” and “Charter Oath of Five Articles” etc. at the end of the Edo period.

However, in reality “One ruler over ten thousand people” split into those emphasizing “One ruler” (Conservative faction), and those favoring “Ten thousand people” (Liberal faction). The enactment process of the Meiji Constitution did not just take place amidst this tug-of-war, but the two factions also carried on even fiercer competition over the content of the Meiji Constitution. We see clashing over interpretation of the Meiji Constitution between HOZUMI Yatsuka's Imperialism, and MINOBE Tatsukichi's Emperor Organ Theory. They both emanated from the social elite, and conducted their battles in “esoteric”-type ways.

Over time the general populace got embroiled in the two sides, making the issue “exoteric”, which shifted the rivalry further into society. The first to become exoteric within Taisho-period democracy was the “Ten thousand people” faction. Its specific success story was the establishment of universal male suffrage, but this had the adverse effect of encouraging an exoteric nature in the “One ruler” faction. For example, the issue of supreme command became seed for political strife, and right-wing leanings advanced in the major party. In this way, the political swinging to left and right within Japanese society increased in magnitude, and in the end the whole came to converge on the “One ruler” faction on a large scale.

This study meeting thus re-educated us about the Emperor system in modern Japan, of how politics were at its root, long before any focus upon its cultural significance.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于“阿尔萨斯研讨会”的学习会
学术开拓推进项目① 构筑以异文化研究为视点的国际日本学

关于“天皇・天皇制——阿尔萨斯研讨会”的第3次学习会
“两种‘密教’和两种‘显教’——日本宪政史中的天皇

报告人：坂野 润治（东京大学名誉教授）

时 间：2008年9月27日（周六）14：00 – 16：00

地 点：法政大学市ヶ谷校区 80 年馆 7 层会议室

主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长）

2008年7月12日（周六）下午14：00至16：00，法政大学国际日本学研究所位于法政大学市ヶ谷校区80年馆7层的会议室召开了关于“天皇・天皇制——阿尔萨斯研讨会”的第3次学习会。在本次学习会上，东京大学名誉教授坂野润治就近代日本的天皇・天皇制进行了题为“两种‘密教’和两种‘显教’——日本宪政史中的天皇”的主旨演讲。

本次学习会与前两次相同，依然采取内部会议的形式。会上，坂野润治教授以其近作《日本宪政史》（东京大学出版社）为主要依据，围绕着日本宪政的建立与

发展过程, 简明扼要地向与会的 10 名代表讲解和说明了日本战前的天皇制是如何在自明治维新起经大正至昭和初期的历史脉络中, 不断演变发展并最终得以确立的。

坂野润治教授认为, 近代日本政治体制的确立过程肇始于明治维新时期, 而“一君万民”这一基调始终贯穿其中。社会上下均开始不断探索, 努力去寻找一条能够使“一君”和“万民”这两种社会运动协调互动的发展道路。实际上, 在幕府统治末期的《公议论》、《五条誓文》等文书中就可以发现, 当时的人们已经认识到, 将天皇作为“一君”来顶礼膜拜和通过开设议会来向“万民”敞开政治的大门这二者就如同马车的两个车轮一样是相伴而生, 缺一不可的。

但是, 在现实中, “一君万民”被片面强调“一君”的保守派和片面强调“万民”的自由派割裂开来。明治宪法就是在这样的背景下制定的。因此, 在明治宪法的内部也处处渗透着两派的激烈斗争。在对明治宪法所作的解释之中, 穗积八束的天皇主义和美浓部达吉的天皇机关说之间的严重对立也是如此。可以说, “一君”派

和“万民”派的分歧既存在于社会精英阶层之中, 同时又是以“密教”式的状态在不断相互斗争。

但是随着普通国民也被卷入其中, “一君”派和“万民”派的斗争不断被“显教”化, 从而变得更加具有社会性。通过“大正民主”, “万民”派首先得以“显教”化。其取得的成果之一就是颁布了《男子普通选举法》。但“万民”派的举动同时也引发了“一君”派的反弹, 促使它也随之“显教”化。例如, 统帅权问题就成为政治斗争的工具, 推动了大政党的右倾化。这也就使得日本社会左右摇摆的幅度不断增大, 并最终全体倒向“一君”派这一侧。

综上所述, 通过本次学习会, 我们再次认识到, 在探讨天皇制在近代日本的文化意义之前, 还是应先认清其本质上的政治属性。

【执笔者: 安孙子 信

(法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授)】

알자스 심포지움 학습회

학술 프론티어 서브프로젝트① 이문화 연구로서의 「국제 일본학」 구축

천황·천황제 알자스 심포지움을 위한 제3회 학습회

「두개의 『밀교(密教)』와 두개의 『현교(顯教)』——일본 헌정사에 있어서의 천황」

- 보고자 반노 준지씨(坂野 潤治) 동경대학(東京大学) 명예 교수
- 일 시 2008년 9월 27일(토) 14:00 ~ 16:00
- 장 소 호세이 대학(法政大学) 이치가야 캠퍼스 80년관 7층 회의실
- 사 회 아비코 신(安孫子 信, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장)

2008년 9월 27일(토), 14시부터 16시 지나서까지, 호세이 대학 이치가야 캠퍼스 80년관 7층 회의실에서, 「천황·천황제 알자스 심포지움을 위한 제3회 학습회」가 열렸다. 이날 학습회에서는 반노 준지 동경대학 명예 교수로부터, 근대의 천황·천황제에 관하여, 「두개의 『밀교(密教)』와 두개의 『현교(顯教)』——일본 헌정사에 있어서의 천황」이라는 주제의 강의를 있었다.

이전 2회에 걸쳐 실시되었던 것과 마찬가지로, 본 학습회는 내부적인 회합인 관계로 약 10명 정도가 참가하였는데, 메이지 유신(明治維新)에서부터 다이쇼(大正)·쇼와(昭和) 초기에 이르는 역사의 흐름 속에서, 전전(戰前) 천황제가 어떻게 성립하였는가를, 반노 교수 자신의 근저 『일본 헌정사』(동경대학 출판회)를 기본 텍스트로, 헌정의 성립과 전개의 관점에서 지극히 명쾌하게 설명했다.

즉, 메이지 유신기에 시작된 근대 일본 정치 체제의 확립 과정은, 「일군 만민(一君万民)」이라는 말에 나타나 있는, 사회의 상부와 하부에서 일어난 이 두개의 운동——「일군」과 「만민」——을 협동시킬 수 있는 방법의 모색으로부터 시작되었다. 막부 말기의 「공의론(公議論)」이나 「오개조(五箇条)」의 서문(誓文) 등에서도 알 수 있듯이, 천황을 「일군」으로 받드는 것과, 의회 개설을 통해서 「만민」에게 정치를 개방하는 것은, 차의 두 바퀴처럼 동반되는 것으로 인식되었던 것이었다.

그러나 실제로 있어서는, 「일군만민」은 「일군」의 강조(보수파)와 「만민」의 강조(자유주의파)로 분열되어 갔다. 메이지 헌법의 제정 과정이 바로 그 줄다리기의 장이었는데, 메이지 헌법 내부에서도, 양파는 한층 더 극렬한 대립을 계속했다. 메이지 헌법의 해석에 있어서, 호즈미 야쓰야(穂積八束)의 천황주의와 미노베 다츠키치(美濃部達吉)의 천황기관설(天皇機関説)의 대립이 바로 그것이다. 이러한 대립은 사회의 엘리트 사이에서 일어난 것이며, 양자가 모두 「밀교」적 상태로 대립했다고 할 수 있겠다.

이극고 양자가 함께 일반 국민을 끌어 들여 「현교」화 해 감에 따라서, 그들의 대립 또한 사회적인 대립으로 전환해 갔다. 다이쇼 데모크라시를 통해서 먼저 「현교」화 한 것은 「만민」파였다. 그 성과로 획득한 남자 보통 선거법의 성립은 역 스프링 효과를 발생시켜 「일군」파 또한 「현교」화를 촉진시켰다. 예를 들면 통사권(統帥權) 문제가 정쟁(政争)의 도구로 대두되었으며, 대 정당의 우경화도 확산되었다. 이렇게 해서 일본 사회의 좌우의 변화는 진폭을 거듭하여, 마침내는 그 전체가 「일군」쪽에 대폭 수렴되어 갔다.

이상, 이번 학습회에서는, 천황제가 근대 일본에 있어서는, 그것의 문화적 의미를 운운하기 이전에, 그야말로 정치 그 자체였던 것을 재삼 깨달았다.

【기사 집필: 아비코 신

(호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

日本人を作る ― 沖縄と北海道における同化政策

ローザ・カーロリ (ベネチア大学東アジア研究所教授・
法政大学国際日本学研究所客員所員)

- 日 時：2008年8月4日(月) 14時00分～16時00分
- 場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館2階国際日本学研究所セミナー室
- 司 会：安孫子 信(法政大学国際日本学研究所所長)

8月4日(月)の14時から16時まで、2時間にわたって、法政大学国際日本学研究所セミナー室で、ローザ・カーロリ氏(ベネチア大学東アジア研究所教授・法政大学国際日本学研究所客員所員)を迎えての特別セミナーが開催された。まずはカーロリ氏から、“The making of Japanese: Assimilation Policy in Okinawa and in Hokkaido”(「日本人を作る 沖縄と北海道における同化政策」)の題で講演がなされ、引き続きそれを受けての熱心な討議が行われた。

明治初年、廃藩置県により、それまでの村落・藩意識をやぶる日本人意識の形成が課題となっていたが、このことは、それまでは‘日本’とみなされておらず、今、新たに行政的に日本に組み入れられることになった沖縄と北海道とは、特別な困難を伴うものであった。カーロリ氏は文化的同化という、この困難な過程が、沖縄と北海道の両地域でどのように遂行されていったかを、まずは両地域の差異を浮き彫りにする形で説明して下さった。両地域では人口、経済水準、文化水準といったあらゆる面で差があって、日本への同化とそれが生み出す諸問題も、同様には語れないのである。しかしその上で示唆されたのは、両地域でともに根底にあったのは日本人による植民地化ということだったのであり、それゆえに、沖縄人・アイヌ

人は日本人との間に sameness 以上に otherness を持ち続けることとなったということ、そして、それが戦後近年において、沖縄人・アイヌ人による自文化アイデンティティ再確認の動きを引き起こしているということであった。

【記事執筆：安孫子 信
(法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)】



セミナー風景

Hosei University Research Center for International Japanese Studies Special Seminar: report

The Making of Japanese: Assimilation Policy in Okinawa and in Hokkaido

- Speaker Rosa Caroli (Professor, East Asian Institute, University of Venice; Guest Staff, Research Center for International Japanese Studies, Hosei University)
- Date Monday, 4 August 2008, 14:00 – 16:00
- Place Hosei University Ichigaya Campus, '58 Building 2F, Research Center for International Japanese Studies Seminar Room.
- Chair ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies)

A two-hour Special Seminar was held in the Hosei University Research Center for International Japanese

Studies seminar room on Monday, 4 August, from 14:00 to 16:00 to welcome Rosa Caroli (Professor, East Asian Institute, University of Venice; Guest Staff, Research Center for International Japanese Studies, Hosei University). It began with a lecture by Rosa Caroli, titled “The making of Japanese: Assimilation Policy in Okinawa and in Hokkaido”, which then led to an enthusiastic discussion.

As a result of the dissolution of domains and establishment of prefectures in early Meiji, attention focused on the formation of a Japanese consciousness to expel any former village and fief consciousness. However, this caused particular difficulties in Okinawa and Hokkaido, who had never been considered “Japan”, but now faced becoming administratively part of Japan for the first time. Prof. Caroli explained how the troubled process of cultural assimilation was implemented in both Okinawa and Hokkaido, by first painting a clear picture of the diversity between the two regions. There were differences in aspects of population, economic and cultural standards, and the problems that would arise through their assimilation with Japan cannot be told in the same breath. Nevertheless, she suggested that a fundamental shared by both

regions was colonialization by the Japanese, which caused Okinawans and Ainu to uphold their “otherness” over “sameness” vis-à-vis Japanese, and which led to movements, in the recent postwar period, by Okinawans and

Ainu re-establishing their own cultural identities.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

法政大学国際日本学研究所特別研究会報告 塑造为日本人 —— 对冲绳和北海道的同化政策

报告人：罗萨·卡洛里（威尼斯大学东亚研究所教授、法政大学国际日本学研究所客员所员）

时 间：2008年8月4日（周一）14：00 - 16：00

地 点：法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层国际日本学研究所研究室

主持人：安孙子 信（法政大学国际日本学研究所所长）

8月4日（周一）下午 14：00 至 16：00，法政大学国际日本学研究所位于法政大学市ヶ谷校区 58 年馆 2 层的国际日本学研究所研究室召开特别研讨会，邀请罗萨·卡洛里教授（威尼斯大学东亚研究所教授、法政大学国际日本学研究所客员所员）进行了题为“The making of Japanese: Assimilation policy in Okinawa and in Hokkaido”（“塑造为日本人 —— 对冲绳和北海道的同化政策”）的演讲。演讲结束后，与会人员进行了热烈

的讨论。

明治初年，日本推行“废藩置县”。如何打破人们自古以来所形成的“村落・藩意识”，进而转变为“日本人意识”成为了当时的重大课题。对于从未将自己认同为“日本”，而被新纳入到日本行政区划内的冲绳和北海道而言，要实现这一转变则更为困难。罗萨·卡洛里教授将这种转变称为“文化同化”。那么，日本政府是如何在极其困难的情况下，最终在冲绳和北海道实现这种转变的呢？罗萨·卡洛里教授首先全面分析了冲绳和北海道这两个地区与日本其他地区之间的差异。由于这两个地区在人口数量、经济水平、文化水准等几乎所有方面，都与日本其他地区存在着巨大的差异，因此，在对这两个地区进行同化的过程中所产生的问题，与其他地区相比，也是无法等量齐观的。这也就意味着，日本政府对冲绳和北海道进行同化的实质就是日本人对这两个地区的殖民地化。正因为如此，冲绳人・阿伊努人在与日本人保持共性的同时，也始终保持着一定的差异。这也就导致冲绳人・阿伊努人在战后，尤其是近年来，开始不断开展重新对自身文化进行身份认同的活动。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）】

호세이 대학 국제 일본학 연구소 특별 세미나 보고 일본인을 만들다 —— 오키나와 (沖繩) 와 홋카이도 (北海道) 에 있어서의 동화 정책

- ・ 보고자 로자 카로리씨 (베네치아 대학 동아시아 연구소 교수·호세이 대학 국제 일본학 연구소 객원 소원)
- ・ 일 시 2008 년 8 월 4 일 (월) 14:00 ~ 16:00
- ・ 장 소 호세이 대학 (法政大学) 이치가야 (市ヶ谷) 캠퍼스 58 년관 2 층 국제 일본학 연구소 세미나실
- ・ 사 회 아비코 신 (安孫子 信, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장)

8 월 4 일 (월) 14 시부터 16 시까지, 2 시간에 걸쳐서, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 세미나실에서, 로자 카로리씨 (베네치아 대학 동아시아 연구소 교수·호세이 대학 국제 일본학 연구소 객원 소원) 을 맞이하여 특별 세미나가 개최되었다. 먼저 카로리씨로부터 “The making of Japanese: Assimilation Policy in Okinawa and in Hokkaido” (「일본인을 만들다 —— 오키나와 (沖繩) 와 홋카이도 (北海道) 에 있어서의 동화 정책」) 이라는 제목으로 강연이 있는

뒤, 강연 내용에 관한 열띤 토론이 진행되었다.

메이지 (明治) 초기, 폐번치현 (廢藩置縣) 에 의해, 당시까지 존재하던 촌락·번의 의식을 갱신하는, 일본인의 의식 형성이 과제로 대두되었다. 특히, 그 이전까지는 ‘일본’으로 간주되지 않았다가, 당시, 새롭게 행정적으로 일본에 편입되게 되는 오키나와와 홋카이도로서는 한층 곤란한 상황에 직면하게 되었다. 카로리씨는 문화적 동화라고 할 수 있는 이 어려운 과정이, 오키나와와 홋카이도 양 지역에서 어떻게 수행되었는가를, 우선은 양 지역의 차이를 선명히 드러내보이는 구도로 설명했다. 양 지역은 인구, 경제 수준, 문화 수준 등 여러 면에서 차이가 있었으며, 일본에의 동화와, 그것이 생성한 제반 문제들 또한 동일시 될 수는 없을 것이다. 그러나 그러한 전제하에 써가 시사하는 바는, 양 지역 모두 근본적으로 동일했던 것은 일본인에 의한 식민지화였다는 점, 따라서, 오키나와인·아이누인은 일본인과의 사이에 sameness 이상으로 otherness 를 견지하게 되었다는 점, 그리고, 그것이 전후 근년에 이르러, 오키나와인·아이누인들의 자문화 아이덴티티의 재확인 움직임을 유발시키고 있다는 점이었다.

【기사 집필: 아비코 신 (安孫子 信,

호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

ローザ・カーロリ先生の研究所訪問

●日 時：2008年7月24日（木）11時00分～12時00分

●場 所：法政大学国際日本学研究所

ヴェネチア（カ・フォスカリ）大学教授で法政大学国際日本学研究所客員所員でもある、日本近代史、沖縄近代史の専門家、ローザ・カーロリ（Rosa Caroli）先生が、この度、ヴェネチア・法政両大学間の交換研究員として来日された（7月21日～8月5日）。7月24日（木）には、カーロリ先生と、国際日本学研究センター長星野勉と国際日本学研究所長安孫子との

間で、イタリアにおける日本学研究・教育の現状や、また今後の相互の研究・教育協力などについて意見交換を行う機会が持たれた。

【記事執筆：安孫子 信

（法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授）】



左より安孫子所長、ローザ・カーロリ教授、星野センター長

Report on Professor Rosa Caroli's visit to the Research Center for International Japanese Studies at Hosei University.

Date Thursday, 24 July 2008, 11:00 – 12:00

Place Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Professor Rosa Caroli visited Japan as an exchange scholar.

Professor of the University of Venice (Ca' Foscari) and guest staff member of Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Professor Rosa Caroli specializes in modern Japanese history and modern Okinawan history, and on this occasion visited

Japan (21 July-5 August) as an exchange scholar between Venice and Hosei Universities. There was an opportunity on 24 July for HOSHINO Tsutomu, Director of the Center for International Japanese Studies and ABIKO Shin, Director of the Research Center for International Japanese Studies to exchange views with Professor Caroli regarding the state of research and education in Japanese Studies in Italy, as well as about future cooperative research and teaching collaboration.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Professor, Faculty of Letters)

关于罗萨·卡洛里教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2008年7月24日（周四）11：00 – 12：00

地 点：法政大学国际日本学研究所

威尼斯大学教授罗萨·卡洛里（Rosa Caroli）是日本近代史、沖縄近代史研究领域的专家，同时也是法政大学国际日本学研究所的客员所员。罗萨·卡洛里教

授此次作为威尼斯大学・法政大学两校之间的交换研究员来日访问（7月21日～8月5日），并于7月24日（周四）与法政大学国际日本学研究中心主任星野勉、法政大学国际日本学研究所所长安孙子信就意大利的日本学研究・教育现状以及今后的相互研究・教育合作等问题交换了意见。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）】

로자 카로리 교수 호세이 대학 국제 일본학 연구소 방문 보고

- ・일시 2008년 7월 24일(목) 11:00 ~ 12:00
- ・장소 호세이 대학(法政大学) 국제 일본학 연구소

로자 카로리 교수가 교환 연구원으로 내일했다.

베네치아 대학(카·포스카리) 교수이자 호세이 대학 국제 일본학 연구소 객원 소원이며, 일본 근대사와 오키나와 근대사의 전문가인 로자 카로리(Rosa Caroli)

씨가 베네치아·호세이 양 대학 간 교환 연구원으로 내일했다(7월 21일-8월 5일). 7월 24일(목)에는 카로리씨와 국제 일본학 연구 센터장인 호시노 츠토무(星野勉) 씨와 국제 일본학 연구소 소장인 아비코 신(安孫子 信) 이 만나, 이탈리아에 있어서의 일본학 연구와 교육 현황, 그리고 금후의 상호 연구와 교육 협력 등에 관해 의견을 교환하는 기회를 갖았다.

【기사 집필: 아비코 신(安孫子 信, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

島田信吾先生の研究所訪問

● 日 時: 2008년 9월 16일(화) 12시 00분 ~ 13시 00분

● 場 所: 法政大学国際日本学研究所

デュッセルドルフ大学東アジア研究所教授で法政大学国際日本学研究所客員所員でもある、日本社会学の島田信吾先生が来日され、9月16日(火)には研究所で、同教授と、研究所担当星野理事、所長安孫子、所員王との間での懇談の機会が持たれました。デュッセルドルフ大学と法政大学とは現在、一般協力

協定締結へ向けての詰めの協議中でもあり、協定締結後の、日本学での研究・教育協力について、有意義な意見交換が行われました。

【記事執筆: 安孫子 信

(法政大学国際日本学研究所所長、文学部教授)】



左より 安孫子所長、島田教授、星野センター長、王教授

Report on Professor SHIMADA Shingo's visit to Research Center for International Japanese Studies at Hosei University.

Date Tuesday, 16 September 2008, 12:00 - 13:00

Place Hosei University Research Center for International Japanese Studies

Professor SHIMADA Shingo made a visit to Japan.

Professor of the University of Düsseldorf East Asia Institute and guest staff member of Hosei University Research Center for International Japanese Studies, Professor SHIMADA Shingo of Japanese sociology made a visit to

Japan, and on Tuesday 16 September there was opportunity for an informal discussion between Professors Shimada and Hoshino, Governor of the Board, and Abiko, Director of the Research Center. Düsseldorf and Hosei Universities are presently in final consultation towards establishing general cooperative arrangements. A worthwhile exchange of views took place concerning Japanese Studies research and teaching collaboration once the arrangements are concluded.

Report by ABIKO Shin (Director, Hosei University Research Center for International Japanese Studies; Professor, Faculty of Letters)

关于岛田信吾教授访问法政大学国际日本学研究所的报告

时 间：2008年9月16日（周二）12：00 - 13：00
地 点：法政大学国际日本学研究所

杜塞道夫大学东亚研究所教授岛田信吾是日本社会学研究领域的专家，同时也是法政大学国际日本学研究所的客员所员。9月16日（周二），岛田信吾教授在法政大学国际日本学研究所与法政大学主管国际日本学研

究所的理事星野勉、法政大学国际日本学研究所所长安孙子信、所员王敏进行了深入交流。鉴于杜塞道夫大学与法政大学关于缔结一般合作协议的谈判目前已进入最后阶段，因此双方就该协议缔结后，在日本学的研究・教学领域开展合作的有关事宜相互交换了富有建设性的意见。

【执笔者：安孙子 信

（法政大学国际日本学研究所所长、文学部教授）】

시마다 신고 (島田信吾) 교수 호세이 대학 국제 일본학 연구소 방문 보고

- ・일시 2008년 9월 16일 (화) 12:00 ~ 13:00
- ・장소 호세이 대학 (法政大学) 국제 일본학 연구소

시마다 신고 교수가 내일했다.

듀셀도르프 대학 동아시아 연구소 교수로 호세이 대학 국제 일본학 연구소 객원 소원이기도 한, 일본 사

회학 전문가 시마다 신고 교수가 내일, 9월 16일 (화), 본 연구소에서 연구소 담당인 호시노 (星野) 이사, 연구소 소장인 아비코 (安孫子), 연구소 소원인 왕 (王) 교수와 만나 간담회를 가졌다. 듀셀도르프 대학과 호세이 대학은 현재 일반 협력 협정 체결을 위한 막바지 협의가 진행중이기도 한데, 협정 체결 후 일본학 연구와 교육 협력에 관한 유익한 의견 교환이 이루어졌다.

【기사 집필：아비코 신 (安孫子 信, 호세이 대학 국제 일본학 연구소 소장, 문학부 교수)】

翻訳者紹介

(英語翻訳)

バーバラ・クロス (ロンドン大学 SOAS)

(中国語翻訳)

謝 宗睿 (法政大学国際日本学研究所 外国人客員研究員)

吳 婧 (法政大学大学院国際日本学インスティテュート)

(韓国語翻訳)

申 惠蘭 (法政大学大学院国際日本学インスティテュート)

新刊案内

21st Century Center of Excellence Program, International Japanese Studies Research Series in English, Vol. 1 Japanese Studies: Seen from Europe, Seen from Japan

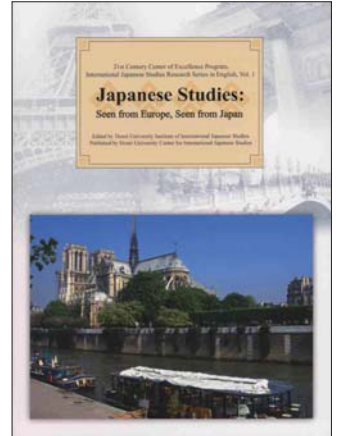
Edited by Hosei University Institute of International Japanese Studies

Published by Hosei University Center for International Japanese Studies

Foreword: What is "International Japanese Studies"?HOSHINO Tsutomu
 "Japanese Studies": Seen from Europe, Seen from JapanJosef A. KYBURZ
 Knowledge Production, Endogenous vs ExogenousHarumi BEFU
 Transcending the Boundaries: The Case of the Anthropology of JapanKUWAYAMA Takami
 Anthropologists and Their Areas: Some Thoughts on a Eupo/Japanese ApproachJoy HENDRY
 Dimensions of Comparison and Translation: Rethinking Japanese StudiesSHIMADA Shingo
 The Perception of Space and Time in Europe and Japan: in Defence of Cultural RelativismJosef A. KYBURZ
 Korea's Colonial Legacy and Japanese studiesCHOI Kilsung
 Sino-Japanese Cultural Junctions and Disjunctions from a European PerspectiveW. F. VANDE WALLE
 Trapped in the images of "Good Old Europe":

Difficulties in de-orientalizing knowledge production in Japanese/Area StudiesSteffi RICHTER
 Japan's Growing Cultural Power: The Example of Manga in FranceJean-Marie BOUISSOU
 The Human Kaleidoscope of the Edo Period as Seen in LanguageTANAKA Yūko
 Tradition and Contemporaneity: Can Noh Research Be Internationalized? YAMANAKA Reiko
 On the Differences between *Kokushi* and *Nihonshi*: A Study of the Collective Consciousness

and Social Order Exhibited in Revolts and Festivals of Mid-Nineteenth Century JapanSAWATO Hirotsato
 Approaches in Japanese Intellectual History and Their Reflection in Critiques of Maruyama MasaoAnnick HORIUCHI
 Is Hanami a Unique element of Japanese Culture?SHIRAHATA Yōzaburō
 Ethnology, Folklore Studies, and the Nation State: The Contribution of Yanagita KunioKABAYAMA Kōichi
 The Potential of Watsuji Tetsurō's PhilosophyHOSHINO Tsutomu
 Addressing the National Character of Taste: Kuki's Japan and Bergson's FranceABIKO Shin
 Is Genuine Intercultural Understanding Possible?: An Exploration Based on Perceptions of the ClassroomSAGARA Masatoshi
 Japanese Collections in European Museums and the Development of Japanese StudiesJosef KREINER



【国際日本学研究叢書 9】

『中国人の日本研究——相互理解のための思索と実践——』

目次
 コンセプト王 敏

I 中国における日本研究の概観

中国の日本研究——回顧と展望——李 玉（翻訳：坂部晶子）
 中国の日本史研究——日本研究論著の統計的分析を中心に——李 玉（翻訳：坂部晶子）
 現代中国における日本文学の紹介——日本文化の一環として——王 敏

II 時代を追う日本観の変容

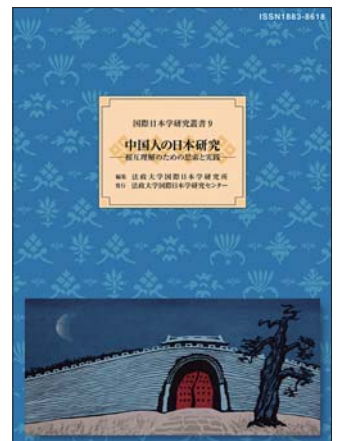
唐宋詩人の「日本」の想像葉国良（翻訳：林恵子）
 近代における中国人の日本観の変遷王曉秋（翻訳：王雪萍）
 近代文化論から見た李春生の日本観——『主津新集』と『東遊六十四日隨筆』を中心に——徐興慶
 20世紀10-20年代中国の教科書に見る日本像——民国臨時政府——南京政府成立まで——徐 永
 中国映画の中の日本人像孫雪梅（翻訳：玉腰辰己）
 日本留学時期の周恩來の日本観——『周恩來旅日記』を手がかりに——胡 鳴

III 受容された日本の文学と言語

中国近代文学の発生と発展における中日関係——文化交流から生存体験まで（概要）——李 怡（翻訳：及川淳子）
 清末民初における日本語文学漢訳題材の特徴を論じる付建舟（翻訳：小池 陽）
 五四時期の「小詩」による俳句の取り込みについての総論羅振亜（翻訳：金澤 妙）
 「憂い顔の童子」——森の中の孤独な騎士——許金龍（翻訳：石岡陶子）
 「偽詞」の帰順と近代中日文化の相互作用——「衛生」、「物理」、「小説」を例に——馮天瑜（翻訳：及川淳子）

IV 日中文化研究

新しい日本と新しい中国とを結ぶべき紐——陶晶孫『日本への遺書』を読む——楊劍龍（翻訳：孫軍悦）
 中国人の日本における国際理解に関する研究楊曉文
 新渡戸稲造と日本の文化外交劉岸偉
 「変節」に寛容な日本の現象——「変節」「転向」考察その1——王 敏
 転向と向き合う作家・辻井喬論——「変節」「転向」考察その2——王 敏



法政大学国際日本学研究所・
 国際日本学研究センター

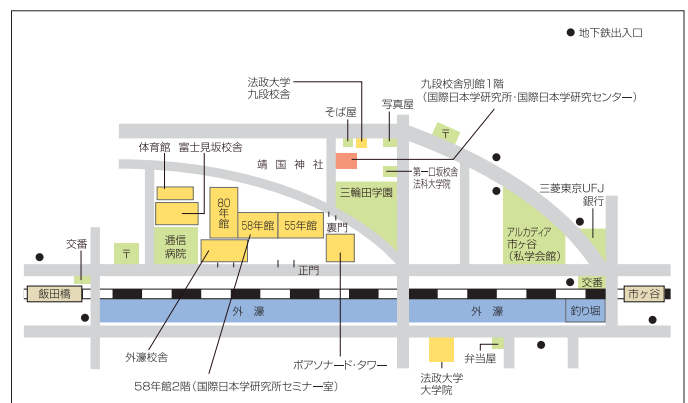
〒102-0073

東京都千代田区九段北3-2-3 九段校舎別館1階

TEL. 03-3264-9682 FAX. 03-3264-9884

E-mail nihon@hosei.ac.jp

URL: http://aterui.i.hosei.ac.jp/



この冊子は再生紙を使用しています。